

## 静岡大学

# 地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

## 第5号

---

### 目次

成果報告書第5号の刊行にあたって	
地域課題解決支援プロジェクトの概要	3
地域課題一覧	
公開シンポジウム「地域連携が拓く教育と研究の可能性」	9
伊豆半島における地域づくりの課題と可能性	
フューチャーセンター×地域～対話と協働の取組事例から～	
しずおかキッズカフェ	
被災地に緑を!～全国の農業クラブと挑戦した環境保護活動～	
パネル・ディスカッション	
地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況	43
地域人材育成研修会実施報告	
「南伊豆町伊浜区における地域資源の掘り起こしを目的としたご当地カルタの制作」	51
地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト	

---

静岡大学地域創造教育センター

2019

# 成果報告書第5号の刊行にあたって

静岡大学学長  
石井 潔

戦後に設立された他の多くの新制大学と同様、昨年6月に静岡大学は創立70周年を迎えました。この長い歴史の下で、本学にとって地域連携・社会貢献活動は、これまでもまたこれからもきわめて重要な果たすべき役割の一つとなっています。一昨年には「地域志向大学」宣言を行いました。こうした方針は、本学のこれまでの歩み・精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するものです。



平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ168件の応募に対し、これまで111件を採択して支援を行ってきました。

平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げ、第1期・第2期の公募で県内各地から計44件の応募をいただき、地域に赴きヒアリングを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。興味関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかりながら、年度をまたいで諸課題に取り組んでいます。その後の成果も積み上がり、このほど成果報告書第5号を刊行する運びとなりました。

本学は、その始まりから静岡の地に根を張って成長してきました。平成27年度には「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にも採択され、他大学、自治体、企業と連携して県内就職率の向上、新たな産業の創出、地域活性化に取り組んできました。COC+事業自体は、5年間の委託期間をこの3月で終了しますが、地方創生に少しでも寄与するため、地域と連携・協働しつつ、地域課題の解決支援を引き続き推進していきます。

平成28年度に設置された、全学部横断教育プログラム「地域創造学環」は、本学の地域志向宣言の核となる取組で、地域の抱える課題を解決支援する人材を育てようとしています。この地域課題解決支援プロジェクトも地域創造学環のフィールドワーク等とリンクしながら展開しており、この3月に第1期生が卒業します。

これまで刊行した成果報告書でもふれていますが、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充する、それがまた次なる社会連携につながるといった、教育・研究・社会連携の好循環をつくるのが本学の目指す方向性であると考えます。今回の報告書で取り上げた取組もようやく地域に根付こうとしているところですが、ご一読いただき、幅広くご助言、ご示唆をいただけますよう、よろしく願い申し上げます。



## 地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

- ・ウェブサイト URL： [http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies\\_index.html](http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html)
- ・連絡先： TEL 054-238-4817、E-mail： [kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp](mailto:kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp)

### 地域課題一覧

#### 《第1期》

No	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりい（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
8	油山川のマコモを根絶する会 (袋井市)	油山川では700mにわたってマコモが繁殖し、流下能力を著しく低下させ、景観上からも問題になっている。河川管理者が年に1回刈り取りを行っているが、マコモは繁殖力が旺盛で、2カ月もすると元の状態に戻ってしまう。	活動の中で、マコモは根が残っていると再生するが、完全に取り出せば再生しないこと、天地返しにより根が腐り取り出せることが分かった。マコモの生態研究、根絶手法の検証で研究支援を期待する。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功(失敗)事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 (南伊豆町)	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話し合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 (伊豆の国市)	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ/ジョブトレーニング事業 (静岡市)	①ニート(若年無業者)増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場+学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町も多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。

19	浜松都市環境フォーラム (浜松市)	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター (静岡市)	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会 (南伊豆町)	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所もあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オーリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オーリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

《第2期》

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会 (東伊豆町)	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。

3	富士のさとの森づくり実行委員会(御殿場市)	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもって植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていく必要がある。	①学生の意見を反映した森づくりのランドデザインの再構築作業 ②ランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言(整備時期、整備内容の決定)
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏オープンした、シェアオフィス「ふれあいとーふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがいないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例:耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来(菊川市)	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていききたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人富士川っ子の会(富士市)	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 1.地域に求められている居場所とはどんなものか 2.それはどのように形作られるべきか 3.地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人富士川っ子の会(富士市)	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数も多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 1.介護者と要介護者の区分方法 2.適正報酬額の算出 3.団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施 自立援助ルーム 訪問レストランf(浜松市北区)	障害者に対する理解と認知が低すぎ、また障害者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障害者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まずグレーゾーンにどれくらいの障害者が存在しているのか示してほしい。 ②障害者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ(浜松市西区)	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。

14	空き家再生プロジェクト (静岡市駿河区)	空き家の利活用を促進し、地域社会の活性化に貢献することを課題として、次のような活動をしている。 ①空き家に関する研究活動(発生と利活用方法、意識調査) ②空き家の利活用にむけた啓発活動(イベント・セミナー) ③空き家再生活動(マッチングサポート・リノベーション)	積極的にまちづくりへ関わることを目指して、空き家を再生したサテライト研究室を設けて、地域を活性化するためのリサーチ・研究を進めているが、この活動に継続的に関わってもらいたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

[http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies\\_history\\_list.php](http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php)



## 公開シンポジウム

# 地域連携が拓く教育と研究の可能性

日時：2018年12月27日（木）13:15～17:00

会場：静岡大学静岡キャンパス 共通教育A棟301講義室  
松崎町交流拠点施設ふれあいと一ふや。（テレビ会議）

### プログラム：

#### （1）地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1「伊豆半島における地域づくりの課題と可能性」

報告者：深澤準弥（松崎町総務課）

杉沢優太（芝浦工業大学大学院理工学研究科1年／

「空き家改修プロジェクト」稲取設計室代表）

報告2「フューチャーセンター×地域～対話と協働の取組事例から～」

報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）

増田彩香（静大フューチャーセンター運営学生）

報告3「しずおかキッズカフェ」

報告者：小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

報告4「被災地に緑を！～全国の農業クラブと挑戦した環境保護活動～」

報告者：望月基希（静岡県立富岳館高等学校）

新井隆一郎・清水大世・笠井愛莉（農業クラブ キノコ研究班）

#### （2）パネル・ディスカッション

パネリスト：報告者、

課題提案者（NPO法人ローカルデザインネットワーク 荒武優希）

コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター）

### （阿部）

このシンポジウムは「地域連携論」という集中講義と連携しており、「地域連携論」の受講者、学生たち約80人のほか、報告者の方々、地域の方々、学内の教職員の方々に参加していただいています。今回、松崎町から深澤さんにおいでいただいておりますが、テレビ会議システムにより、松崎町の「ふれあいと一ふや。」という交流施設からも参加していただいております。担当は松崎町役場の斎藤一憲さんですが、現在映っているのは松崎高校の校長先生です。また、4月から静岡大学にいらっしゃる予定の松崎高校3年の菊池さんにも参加していただいております。他にもふらりと参加される方がいるかもしれません。

このシンポジウムは、地域課題解決支援プロジェクトと結びついていて、5年前の平成25年に始まり、今6年目になろうとしていますが、地域から課題を提案していただき、それに対して大学が、学生や教職員で関わりたいという人があればマッチングし、コーディネートする取り組みです。

現在、1期、2期合わせて42課題がリスト化されています。伊豆の賀茂地区、松崎町の深澤さんから10件ほどいただいておりますし、東伊豆町、南伊豆町からもいただいております。その三町を合わせて約18件と、42件のうちのかなりの件数を占めます。それだけ危機意識があり、実際に学生や教員に手伝ってほしいというテーマもあるかと思っています。

平成28年に立ち上がった地域創造学環という教育プログラムがありますが、そのフィールドワーク先として松崎町には多くの学生を受け入れていただいていますし、1年遅れで東伊豆町でも荒武さんを代表とするローカルデザインネットワークの方々に受け入れていただいて、大きな学びとやる気をいただいています。そのフィールドワークに参加している学生も来ていますし、受講者の中にもいます。

さらに今回は、地域課題解決支援プロジェクトだけではなく、「しずおかキッズカフェ」について報告していただきます。私は、静岡県社会教育委員会や学校家庭地域連携推進委員会等で、子ども食堂の取り組みが県内で行われていると聞き、それを調べなければいけないと思っていたところ、「しずおかキッズカフェ」は本学の学生がやっていることが分かりました。そこで、どのような取り組みを、どのような連携・ネットワークの中でやっているのか伺いたいと思い、代表の小林さんにおいでいただいています。

授業の中では大学の取り組み、大学と地域の連携の取り組みを主に紹介してきましたし、第1回、第2回の公開シンポジウムはそういう形で進んできましたが、高校で同じような取り組みをしていたという学生も大勢います。そこで、報告4では、静岡県立富岳館高校の先生と生徒に地域連携、地域貢献の取り組みを報告していただきます。とても参考になり、われわれにとって刺激になると思っています。

## 報告 1

## 伊豆半島における地域づくりの課題と可能性

## 松崎町における課題と可能性

深澤準弥（松崎町総務課）

## 1. 松崎町とは

松崎町は伊豆半島の西南部に位置し、東伊豆町は東側、南伊豆町は南端、ペリー来航で有名な下田は東南部にあります（図1）。昔は伊豆半島のブランドは有名で、旅行先として選ばれていました。最近、付け根の熱海の元気が良くて注目されていますが、先端には人やいろいろなものがなかなか回ってこないということで、課題が蓄積されています。今回の報告ではいろいろご案内したいと思います。

松崎町は、綾瀬はるかさんの出世作となったテレビドラマ「世界の中心で、愛をさけぶ」のロケ地で、約半年間ロケをしていました。山田孝之さんも来ていました。佐藤健さんは日曜ドラマの「とんび」でロケに来ていました。雲見という、海岸線の先に富士山が見える風光明媚な場所があります。



図1 松崎町の位置

## 2. 松崎町の課題

伊豆半島先端部の地域づくりの課題は共通しています。まず、人口減少です。松崎町は顕著で、このままいけば2040年には4500人を切ってしまう（図2）。人口が減って65歳以上の高齢者が50%以上になると、「限界集落」という言葉が出てきます。高齢者が増えることによっていろいろな担い手が減るということで作られた言葉ですが、今は逆に年齢

で区切るよりも、元気な高齢者が増えているので、それを活用する方向になってきていますし、国もそういう展開をし始めています。また、「増田レポート」で有名な『地方消滅』では、子どもが生まれずに高齢者が死んでいき、そこに人がいなくなるということで町が消滅するといわれています。生徒がいなくなれば学校も減っていきまますし、町の活気もなくなってきます。町

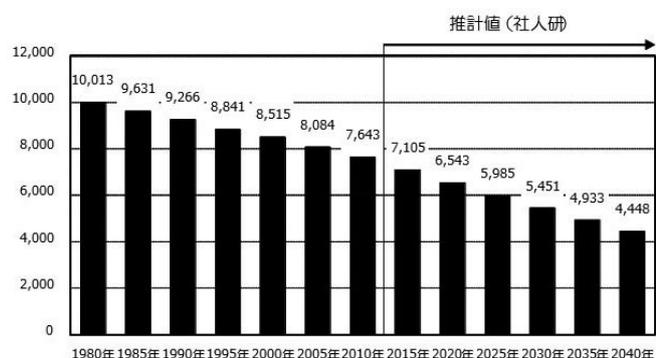


図2 人口減少の推移（出典：国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計（都道府県別推計）』（2019年推計）をもとに筆者作成）

から人が消えていくことでゴーストタウン化していくという問題があります。

他にも松崎町の課題として10個ほど出し、それに対していろいろな人の考え、力、知恵をお借りして、松崎町を何とかしたいという思いで活動し、協力をいただいています。これらの課題は松崎町だけではなく、東伊豆や南伊豆も直面している課題です。

その中の一つに「観光と防災の両立」を挙げています。伊豆半島は海岸線が多く、東南海トラフ地震の津波による大規模な被災が想定されます。先日、スマトラで地震ではない津波がありました。伊豆半島、特に東伊豆もあり得ると言われており、最近ニュースによく出ています。観光と防災という矛盾したものを、両立させていかなければならない時代に来ています。

地域の課題としては人口減少が課題なのか、少子高齢化が原因となるのか、人が減ることによる経済の衰退が問題なのか、安全・安心を担保するための防災対策が課題なのか、これらを見ていくためには現地に行かなければ答えが出しにくいと思います。

今、日本全国で対策を考えています。関係人口・健康人口とあって、地元の人が長く活躍できるまちづくり、もしくは観光だけの一見さんではなく、地域に関わる人口を増やすなど、いろいろな意味で人とモノ、それに付随するものが循環する地域になる必要が課題としてあります。その対策として、移住・定住の促進、観光交流客増などにより人のつながりが生まれることで、何か新しい方向が出るのではないかという気持ちで進んでいます。

課題の中に必ず防災関係を入れているのは、私が4月から防災の担当部署に移ったからです。今までは企画課でまちづくりを中心にやっていましたが、防災に移った関係で、防災というのはまちづくりに外せない部分でもあるので、ぜひ入れておこうということです。

地域をつくることは、まちをつくることです。元々そこに人がいて、生業を持ち、そこで生きることが、その地域のまちをつくる基本になります。人口が減っているからといってゴーストタウンのようにつまらない場所にしていくのも、一人一人が生き生きと光り輝くような場所にするのも、すべてそこにいる人たちです。できるだけ地域づくりに関わることにより、自分事にしていくことが重要です。関わらずに外から距離を持って見ていては、テレビの中でスターが動いているような、自分たちの世界とは関係のない話になってしまいます。そこに関わってもらい、そこにいる人たちに輝いてもらい、来る人に満足してもらえるような地域づくりが、特に伊豆半島に望まれているものだと思います。

### 3. 行政としての責務

「日本で最も美しい村」連合という全国的な組織があります。人口1万人未満の町村もしくは地域が、域外の人たちと連携して生き残っていこうというものです。県内では、川根本町と松崎町の2町です。先日も、川根の地域の方々に松崎町に来ていただき、お互いに知恵を出しあって、海と山で何かできないかという話し合いをしました。課題ばかりでなく松崎町の可能性として、静岡大学と連携するなかで、いずれはインターン受け入れなどのキャリア教育にも携わりたいと考えています。

県内外の自治体との連携・協力として美しい村連合の関係や、東伊豆町、南伊豆町という近くのエリアでの連携・協力を考えています。実際に人口が減っていけば自治体も小規模になり、自治体のあり方自体も考えなければいけません。国の「自治体戦略2040構想研究会」において、2040年を目途に、自治体の広域化など合併以外の生き残りを考えるという方針が出ています。それはお上の考えで言いたい放題やっているような感じもありますが、現場でもっと吸い上げてもらったらいいという意見も出ています。国のホームページを見ると結構面白いことが書いてあるので、興味のある方はご覧ください ([http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000562105](http://www.soumu.go.jp/main_content/000562105)).

pdf)。

移住定住というのはハードルが高いので、最終的に移住に結びつけばいいと思い、二拠点居住を推進しています。二拠点になるきっかけは、その前の関係づくりにあると思います。東伊豆町のNPO法人ローカルデザインネットワークなどは、まさにそのような関係性を元に立ち上がっているNPOですので、詳しいことはこの後、直に荒武さんから聞いてください。

また、防災も考えなければなりません。安全・安心に生活できるように地域をつくっていくことを考えなければいけません。しかし、沿岸部で津波の心配があり、どうしたらいいのかという話が常にされていますが、どこも答えが出せていません。隣の伊豆市では、全国初となるエリア指定で「オレンジゾーン（注意区域）」を定めて、住民同士で意識改革した津波防災まちづくり推進計画を立ち上げています。ただし計画を作って終わりということではなく、今、いろいろな知恵をいただきながら当町でも勉強しています。多分、これが伊豆半島共通の答えになってくると信じてやっています。

景観保全と生命・財産の保護、これが観光と防災の両立です。いかに避難するかというのが重要になってくると思いますが、壁を造って終わりという地域もあります。岩手県の普代村は15mの防潮堤があり、外に出ていた1名の被害で済んだと言われていますが、7年の間に人口がどんどん減りつつあります。何を守るのかを考えなければいけないということです。

地域づくりの課題は各地域一つではなく、さまざまな課題が時代を経て積み重なり、今に重くのしかかっています。幾つもの課題をひもといっていくためには、いろいろな方とのネットワークや、そこにいる人、外から見の人がうまくマッチングしていかないと解決できません。防災のフィールドワークでは、地元松崎高校の生徒とコラボして課題に取り組んでいます。

「おだやかな革命」という映画があります。福島県飯舘村の太陽光発電や、岐阜県郡上市の小水力発電などの取り組みが映されていて、田舎で生き、地域で生業をつくることを改めて問いかけています。生きる価値をどのような形で見出すかをテーマにした映画で、なかなか面白い内容だと思います。地方のあり方、皆さんの生きる方向性などにも少しは影響が出るかもしれないような映画です。

#### 4. 学生たちとの取り組み

静岡大学野球部の学生がフィールドワークに関わっている関係で、松崎町でスポーツ少年団の野球教室ができないかとお願いし、12月16日、小雨の降る中来ていただきました。この地域の18～25歳ぐらいの方は高校を出るとみんな外に出てしまうので、本当にこの世代がいません。大学生が来て、しかもハイレベルな野球をやっているということで、子どもたちが目をきらきらさせて、いい刺激になりました。

地域創造学環のフィールドワークも受け入れています（図3）。当町として何が提供できるかということで、受け入れるときに悩み、課題を出すにももう一度振り返り、社会の不確実な流れの中でどんどん答えが分からなくなっています。何がいいかも分からず、一つ成功したから安泰かという、そうでもない世の中になっているので、常に課題を解決することや、人とのネットワークを身に付けることが必要になってきます。そして新しいことにどんどんチャレンジし、自分の人生の知恵や経験値が蓄積されていくことによって、いろいろな対応が



図3 地域創造学環学生のフィールドワーク

できるようになります。どこでどんな役に立つかわかりませんが、経験と人脈を作り、成長していただければ、日本は安泰だと思います。

今、石部の棚田の畦にLEDを配して、夜にともしています。人に来てもらうために、さまざまな取り組みをやっていきますので、ぜひ松崎町に来て、いろいろなものを見て、好き勝手なことを言って、困っている地方を助けるような気持ちを持っていただければありがたいと思っています。

私の発表は以上ですが、フィールドワークに来ている本田さんがいらっしゃるので、一言感想をお願いします。

**(本田圭美)** 地域創造学環地域経営コース3年の本田です。私は今、松崎町でフィールドワークをしています。具体的には、棚田のLED点灯のお手伝いをし、中高生と松崎の将来と自分の将来について考えるワークショップを行っています。地域活性化は、いざやるとなるとなかなか難しく、どこまでが活性化だろうと悩む日も多いのですが、学生だから現地に行っていくことができると思っています。フィールドワークの中で、松崎だけではなく、伊豆の可能性まで広げられたらいいと思っています。地域創造学環の講義を受けている人も多いと思いますが、皆さんと一緒にフィールドワークに行き、頑張っていきたいと思っています。

**(阿部)** 今の報告にはありませんでしたが、高校での取り組みを見て中学とも結んでほしいということで、11月29日に深澤さん、齋藤さんのご手配で6名のフィールドワーク生が松崎中と交流しています。それらの仲立ちを、すべて深澤さん、齋藤さんたちにいただきました。

## 空き家改修プロジェクト

杉沢優太（芝浦工業大学大学院理工学研究科1年／  
「空き家改修プロジェクト」稲取設計室代表）

### 1. 建築学科について

私は2014年に芝浦工業大学工学部建築学科に入学し、学部2年生のときに空き家改修プロジェクトに参加しました。東伊豆町稲取、神奈川県相模原市、徳島県木沢、群馬県みなかみ町の各地域で活動してきました。今は修士1年で、稲取設計室の代表をしています。

この場に建築学科の人は少ないと思うので、まず建築学科の説明をします。建築は私たちの身近にあるもので、授業ではいろいろな建物を模型で作ったりしています。実際に、現代社会で建築は何ができるか、地域の課題をどのように解決できるかということを学んでいます。先生が課題を出し、実際の敷地で設計課題をすることが多いので、敷地を調査し、模型を作って設計提案をしますが、実際の建物は造りません。地域に対して提案はできますが、それが実際に何の役に立っているのか、途中で分からなくなることがあります。建築を学んだ学生は、実社会に対しどのような貢献ができるのだろうと考えていたときにこの団体に入り、建築学生による地域活性化団体として活動しています。

### 2. 空き家改修プロジェクトと事例

空き家改修プロジェクトは、空き家を改修するだけでなく、空き家改修を通じた地域の活

性化を目的としています。過疎化が進み、空き家も増えていく中で、模型だけでなく、実際のもを造りたいという実践の場を求める学生と、空き家が地域が増えて治安が悪化するのを、空き家を活用したいという地域の方が結びつけば、お互いウィンウィン（win-win）の関係になるのではないかとこの提案です（図1）。

実際にやっていることですが、設計のスキルは学校で身に付け、実際に地域に生かしていきます。建物を使うのは地域の人なので、地域の人を交えて設計し、施工はまちなかにいる大工さんに、私たちには理解できない施工方法を教えてもらいながらやっています。使い方やこれからの町のビジョンを共有し、ワークショップをしていくという流れになります。

私たちの活動の起源は荒武たちの代が始まりで、静岡県内の稲取から始まり、それが好評で第2期からは三つの地域に広がっていき、第3期は5地域での活動となります。今まで、5地域9物件の空き家を改修しました。

私が最初に関わったプロジェクトは、障害者とアーティストの拠点でオルタレゴ（alterego）という施設です。中古の空き家を障害者支援施設に改修しました。障害者は日常生活で不自由することが多いのですが、目の不自由な方の鼻が敏感になるように、別の部分が長けることがあります。ここには素数を何千桁もそらんじている人がいたりして、その人自身が生き生きしていられるような場所を提供できました。

徳島県の木沢村は限界集落で、おじいさんとおばあさんばかりのところ。この地域に人を呼び込むことを課題として、築150年の古民家をゲストハウスに改修しました。そこはすごく自然が豊かで魅力的な土地なのですが、人が行きづらい場所にあり、泊まる場所もなく、人のいる場所もありませんでした。この土地の魅力を知ってもらえば、少しでも移住したい人が増えるのではないかと考え、地域おこし協力隊でもあるオーナーが、木沢の魅力を発信していく拠点をつくりたいということでゲストハウスを造りました（図2）。ここに泊まったお客さんが地域の魅力に共感したら、移住してくれるのではないかとこのことです。

郷土料理もおいしく、僕たちが行くと振る舞ってくれますし、伝統的な農村舞台もあります。観光地に行くときすごく楽しいですが、本当に楽しいのは地域の人々が日常で見ているものを見るとすごく自分たちに近いものを感じるような気がします。

ここからは東伊豆町での活動です。まず、食の拠点としてダイロクキッチンを造りました（図3）。元

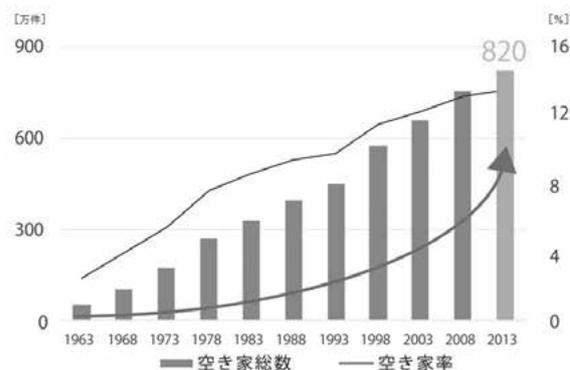


図1 増加する空き家率（国土交通省の資料をもとに報告者が作成）  
<https://www.mlit.go.jp/common/001125948.pdf>



図2 ゲストハウス杉の子（徳島県那賀郡木沢村）



図3 ダイロクキッチン（静岡県賀茂郡東伊豆町）

は消防団の施設でしたが、空き家になっていたの  
で、「食でつながる」をテーマとしてダイロクキッ  
チンを造りました。建築の学生が改修すること  
になり、元々の面影を残すことを大事にしました。  
元の建物の姿は地域の人に愛着があるので、それ  
を残すことによって地域の人にも立ち寄りやすい場  
所になり、年間3分の1以上はイベントとして使  
われています。

僕が携わったのは、仕事の拠点としてのイース  
トドック (EAST DOCK) です。元々は東海汽船  
の切符売場で、それをシェアオフィスに改修しま  
した (図4)。地域に移住するときの課題は、仕事  
がない、あるいは就きたい職業がないことです。  
そこで、仕事の間をつくり、2拠点で居住でき  
るようにすれば、移住に対する敷居が下がるの  
ではないかと考えました。

掃除から始まり、草刈りもしました。地域に対  
して新しいものを提案しようということで、クリ  
エティブなものを目指しました。テーマは「つ  
くる」です (図5)。地域のものを使って働きやす  
い環境をつくっていきました。稲取は海が近くて  
いい町ですが、それを生かせる場所がなかったの  
で、海が一望できるようなオフィス空間にしま  
した (図6)。レーザーカッターを導入し、中のい  
ろんなものも自分たちで作ります。建物のパー  
ツも、町の中の資材を使って作ります。2019年  
の4月にオープンする予定です。

大体竣工したので、プレオープンイベントを行  
いました (図7)。まずは地域の方々にこの場を  
楽しんでほしいということで、「つくる」をテ  
マにしていたこともあり、ものづくりの楽しさを  
子どもたちに知ってもらうために、レーザーカ  
ッターを使ったイベントを行いました。意外にも  
大勢の子どもたちが来てくれました。クリスマス  
に近い12月15日に行ったので、クリスマスツ  
リーを作って着色したり、レーザーカッターで恐  
竜の模型を作ったりしました。改修した建物は、  
地域の人たちが使っていることが一番健全だ  
と思います。外部から人が来て、外部の人たち  
が使うだけでなく、地域の人たちの施設であ  
ることを目指しています。

### 3. 空き家改修プロジェクトの目指すもの

物件ごとに改修してきて、空き家が減って  
いくうちに、われわれが目指すものがだんだん  
見えてきました。東伊豆町だけでも3物件改修  
しましたが、そこから見えてきたものがありま  
す。



図4 イーストドック (EAST DOCK) 全景

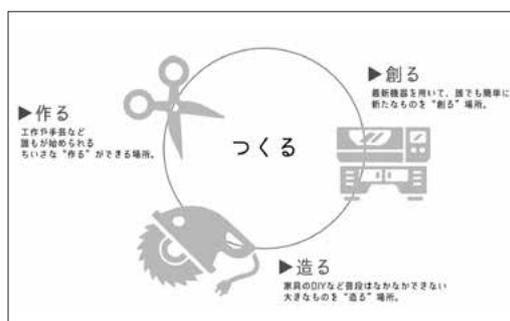


図5 テーマは「つくる」



図6 海の見えるオフィス



図7 プレオープンイベントの様子

稲取には空き家がまだ多く存在しており、全体の空き家像を把握するところから始めました。空き店舗活用イベントに参加して、20店舗以上あった空き家を回り、地域の方々と、これからどうやって活用していくか、どうあるべきかを共有していきました（図8）。

東伊豆町を歩いていると、すごく魅力的な景色や場所があります。せっかく3物件改修したので、1軒を一人の人が使うのではなく、使う人が循環していくようにしました。食の拠点であるダイロクキッチンにはシェアキッチンがあります。イーストドックはシェアオフィスがあります。そこにゲストハウスがあれば、週末に仕事に来た人が、おなかがすいたらダイロクキッチンにご飯を食べに回り、夜は泊まることができます。少し手間にはなりますが、まちなかを歩くことによって景色を楽しむことができます。車で行ってしまとなかなかまちなかを味わうことができないので、「まち全体が宿のような」ということを提案しています（図9）。これが商店街に広がっていけば、まちなかにさまざまなコンテンツが広がり、東伊豆町の魅力にもっと気があるのではないかと考えました。

これらの活動には静岡大学がフィールドワークで参加したり、ローカルデザインネットワークというNPO団体が参加したりしていますが、それらの団体が別々に行動するより、同じ地域で活動しているなら共有した方がいいのではないかと、イーストドックで懇親会を行い、今後の伊豆の姿について話し合う機会を設けました（図10）。集まるとかなりの人数になりますので、これからの伊豆で何か目指すものがあつたときにみんなが助け合えると考えています。

**(阿部)** 本当にいろいろな取り組みをして、それを静岡大学の前に先に見せてくれていて、しかも見せてもらっているだけではなく受け入れていただき、交流の場もつくっていただき、とても感謝しています。東伊豆のフィールドワークは1年後発ですが、本当に良いフィールドワーク地になっていると思います。杉沢さんたちも関わっていますし、その基盤をつくった荒武さんにはパネル・ディスカッションでお話を伺いたいと思います。



図8 空き店舗活用イベントに参加して現状を把握

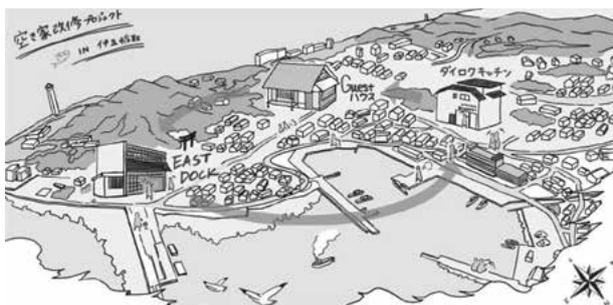


図9 仕事→食事→宿泊の循環を生む仕掛け「まち全体が宿のような」



図10 東伊豆町で活動する仲間たち

報告 2

## フューチャーセンター×地域 ～対話と協働の取組事例から～

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）  
増田彩香（静大フューチャーセンター運営学生）

（宇賀田）

私は静岡大学学生支援センターの教員で、宇賀田です。学内では就職支援、インターンシップ、プロジェクト学習など担当しています。今日は、地域創造学環の増田さんとリレー方式で報告したいと思います。

### 1. 当事者意識の醸成

私たちは、6年前から取り組んでいるフューチャーセンターを通して地域課題に触れてきました。地域課題に対していかに当事者意識を持つかということがよくいわれます。今日は、当事者意識につながる対話と協働という言葉について、考えていることを発表したいと思います。私の方から問題提起した後、増田さんからフューチャーセンターと事例について話してもらいます。

地方創生には、基本的な視点が三つあると表記されています。東京の一極集中の解消、若者の就労・結婚・子育て・未来への展望を開くこと、地域の特性に即した地域課題の解決です。地域課題の解決に当たっては、地域の組織の必要性なども言われていますが、中でも地域住民の当事者意識を醸成することが必要条件となっています。課題解決にはよそ者の存在が必要かもしれませんが、当事者となる住民の意識、あるいは課題解決に関わる外の人を含めての当事者意識が重要だと言われています。

その中で今日お話ししたいのは、「対話」と「協働」です。この言葉について、私たちなりにまとめて最後にお話ししたいと思います。

### 2. フューチャーセンターとは

（増田）

フューチャーセンター5代目ディレクターで、地域創造学環地域経営コース2年の増田です。普段は経営コースで地域資源の活用をしていて、東伊豆でもフィールドワークをしています。今日は、あくまでもディレクターとしてこの場に立っています。

フューチャーセンターには大切にしていることが三つあります。一つ目は多様性、二つ目は対話、三つ目は未来志向です。

「多様性」については、私の目の前にいい例があります。今日のこの場もかなり多様だと感じています。高校生がいて、1～4年生の学部の皆さんが受講生として来てくれていて、もちろん外部の方、今日のパネリストの皆さんなど、いろいろな立場



図1 立場の異なる人同士が対話する場

や年齢の人がこの場にいます。私たちはこれを大切にしています（図1）。

二つ目の「対話」は、議論や討論と似たように並べられることがよくあります。意見を伝えることはもちろん大切ですが、私たちは特に相手の意見を受け止めることを大切にしています。

三つ目の「未来志向」は、フューチャーセンターにフューチャー（future）という言葉が使われているゆえんでもあります。普通の会議は、今、自分たちが持っている材料からできそうなことを考えるフォアキャスト（Fore casting）ですが、未来志向はバックキャスト（Back casting）で、実現したい未来を先に考え、その未来に向かって、今、自分ができることを考えていくことです。私たちはこの考え方を大切にしています。

フューチャーセンターは今、県内に11団体あります。今日は、フューチャーセンターを運営している菊川の方がいらしています。学生では、静岡県立大学のKOKURABOフューチャーセンターと静大フューチャーセンターがあり、高校生がフューチャーセンターのディレクターをやっているところもあります。

実際の運営ですが、フューチャーセンターはサークルや研究室などのコミュニティではなく、基本的にはプラットフォームで、ディレクター陣はいるのですが、そこに集まる人たちは毎回多様で、同じメンバーで行われることはあり得ません。開催までの流れは基本的には同じですが、オーナーによってはこの順番を入れ替えることもあります（図2）。

1. 学生ディレクターと  
テーマオーナーで連絡
2. 日時・会場決定
3. フェイスブックページで告知
4. 参加者への連絡
5. フューチャーセンター開催

図2 フューチャーセンター開催までの流れ

私は5代目ですが、5代目のチャレンジとして、現場でセッションすることを意識してやってきました。今までのフューチャーセンターは、静岡大学にある宇賀田先生の研究室に15~20人が集まり、時には廊下に出てグループ分けをしてセッションすることを繰り返していましたが、2018年はオーナーのいる現場に行き、みんなでセッションすることを意識してきました。

例えば「菊川のコミュニティバスを利用したい」というテーマを扱うときは、実際に菊川市に行き、無理を言ってコミュニティバスを持ってきていただき、バスの中で5分ぐらいセッションをして戻ってくるなど、現場を見ることを大切にしていました（図3）。掛川市のテーマを扱ったときもディレクターが掛川市に行き、その場でセッションしてきました。場を促進する要素は、「場」、「プログラム」、「ファシリテーターの技量」の三つがあると言われています。私たち5代目が意識したのは「場の工夫」です。



図3 菊川市でのセッションの様子

フューチャーセンターで大切にしなければいけないことは何か。先ほど、まず未来があり、今、自分ができることを考えるという話をしましたが、自分にまったく関係のない未来の姿を提示されても、それを自分事にするのはかなり難しいと思います。「これをやりたい」と言った人がいても、「頑張ってください」で終わってしまうのではないのでしょうか。私はフューチャーセンターの中で、未来をつくる過程をみんなで経験することがすごく大切だと思っています。ここを怠って失敗した経験もあるからです。テーマを持ってきた課題提案者が、なぜ、その未来をつくりたいのかをみんなで考え、その過程を見せていくことを大切にしなければいけないと思っています。

これが結局、ステークホルダー同士の出会うプラットフォームである私たちができるとして、

これ以上のことはステークホルダー同士で形にしていった方が効率がいいでしょう。私たちができることはここまでで、ここに尽きるのではないかと考えています。フューチャーセンターの説明は以上です。

### 3. 静大フューチャーセンターの取り組み事例

#### (宇賀田)

静大フューチャーセンターは6年前につくったと言いましたが、フューチャーセンターの起源は、北欧のある会社が既存の枠に捉われない未来の会社像をつくっていかうということで始まったものが日本に入ってきて、地域課題解決の手法として展開されたということにあります。われわれも今、地域課題に触れているのですが、元々は私が就職支援などで、普段、学生と接している中で、社会に出ることへの不信感や不安感を持っている学生が非常に多いと感じていることが始まりでした。それは恐らく、社会人や地域との関わりが学生生活の中で少ないからだろうと思いました。特に社会人と関わるとなると、多くの人はアルバイト先や保護者ぐらいしか接点がないのでしょうか。

一方で、当時一緒にフューチャーセンターをつくった学生は、もっと地域に関わっていきたい、地域課題に関心のある学生は多いと言っていました。地域創造学環のない頃でしたので、そのような場を自分たちでつくっていかうということで静大フューチャーセンターをつくりました。

フューチャーセンターは、建物があるわけではなく、私の研究室のゼミでもサークルでもなく、まったく任意のみんなが集まる場所、プラットフォームです。6年前から始まりましたが、例えば私の研究室の本当に狭いところにいろいろな人が来て話し合います。テーマオーナーといわれる課題を持ち込む人ごとに参加者は変わっていきます。

私が地域課題と大きく関わったきっかけは、冒頭に発表された松崎町へ行ったことです。ちょうど4年前に松崎町で行われたシンポジウムで私たちが発表しました。そこでフューチャーセンターの取り組みをお話したところ、深澤さんを含めた松崎町から、ぜひ松崎町でフューチャーセンターをやってほしいというお話をいただき、学生と共に出かけに行きました。町の中で町の未来についていろいろなことを考えている立場の方に集まっていただき、学生がファシリテーターをしながら場をつくっていきました(図4)。当時の松崎高校と松崎中学の生徒と話したこともあります。



図4 地域課題に関わるきっかけとなった松崎町でのフューチャーセンター開催

ここで気付いたことがありました。町の未来や課題を考えている方々は、それぞれ自分が目指したいものを持っているのですが、それを周りの方と一緒に話をする機会がありませんでした。話をしてみると、およその方向はみんな同じでしたが、大人同士が、場合によっては酒も飲まずに話をする場がないのです。そこへ学生が入ってくると、学生は何も知らないのでも、地域の大人は一生懸命学生に今の地域のこと、これまでの地域のこと、未来の地域のことを語ってくれます。それを学生が聞き出しながら、地域の住民と話していると、それを隣の住民の方が聞いて「なるほど、この人はこんなふう考えているのか」「僕と一緒に考えていたのか」とわかります。そのような対話を繰り返す時間を設けました。そこでは、地域の住民ではなく、課題の主体者でもない学生が、課題の当事者をつないでいく役割を果たしているということに気付きました。

私はそれを「<sup>かすがい</sup>銕機能」と名付け、そういう力が地域に結集されることを「<sup>じりき</sup>地力発掘」と呼びました。地域課題を抱えている地域には、課題解決の力がないわけではなく、それぞれの力が分散しているだけかもしれないと思い、学生が入ることによって、それを結集することができるのではないか、そこに大学が地域課題に関われる機会を設けられるのではないかと、このとき初めて実感することができました。

事例として、もう一つ特徴的なことをお話しします。1年ほど前の島田市での取り組みです。「お茶を使った観光資源を作りたい」というテーマをいただき、静大フューチャーセンターと、島田商業高校でやっていた島田フューチャーセンターが共同で取り組みました。午前中は市役所の会議室を使って対話を進めました。住民の方、地域のことをまったく分からない学生というメンバーで地域のことを話し合い、地域の特徴ある場所を教えてくださいました。その場所を幾つかリストアップし、午後はグループに分かれて、実際にその場所を巡りながら写真やムービーを撮り、撮ったものを集めて一つの観光商品にできないかと考えました。

今、外から来る方の多くはいろいろな情報を得ることができます。観光のきれいな写真なども見ることはできますが、もしかするとそれは非日常的な風景を見ているだけかもしれません。しかし、そこを訪れる方は日常的な地域の風景にも興味があるはずです。私たちはそういうものを発信したかったです。さまざまな立場の方々とグループを組み、三つのエリアで行いました。島田フューチャーセンターの島田商業高校生がムービーをまとめて、一つの動画にしてくれました(図5)。それを島田市の動画コンテストに応募したところ、たまたま受賞しました。



図5 フューチャーセッションから生まれた島田市のPR動画  
(平成29年度島田市動画コンテスト「パカっこいい賞」受賞  
<https://www.youtube.com/watch?v=emYnr6FzndI>)

#### 4. 地域課題解決における対話と協働

これらを通じて、地域の方々だけではなく、学生を含めたいろいろな人たちが関わりながら地域課題に向かっていく中で、対話と協働という作業にフューチャーセンターが実際に関わることができたと感じました。

地方創生を進めている内閣府では、地域運営会議の中に二つの機能が必要だと言われています。まず課題を共有し、解決法を検討していく機能と、それを実行していく機能です。地域の自治会やNPOでこの二つを有している組織もあれば、片方だけを有して運営している組織もあります。フューチャーセンターは、確かに協議する機能はありますが、どちらかといえば協議するきっかけをつくっているプラットフォームだと思っています。協議することが私たちのミッションではなく、協議しやすい場をつくっていくのがフューチャーセンターの役割だと感じています。

そして実行ですが、私たちが実行するのではなく、私たちが手伝いながら地域住民の方、あるいは第三者の方を含めた方々を中心となってできるような、実行のきっかけをつくっていくことです。それは恐らく人と人がつながっていくことが前提になるのだらうと思います。

最後に私たちが今考えていることとして、先ほど「対話」という話が増田さんからありましたが、対話と議論の違いについては、立教大学の中原先生の本によれば、「対話」というのは新しい選択肢を探し出すことであり、「議論」というのは何が正しいのか論を戦わせることです(中

原淳・長岡健『ダイアログ 対話する組織』ダイヤモンド社、2009年)。問題への対処を決める議論に対して、問題に気づきを共有するのが対話だと言われています。

そこから考えたのは、対話をするというのは自分の考えを話したり、相手の考えを聞いたりして意見交換する時間です。その時間を有することにより、自分の意見を肯定されたり、人の意見によって自分の中に変化が生まれたりします。これが対話であり、そういうことを通じて当事者意識が芽生えるのではないのでしょうか。その場所へ行っただけ、話を聞いただけではなく、話を聞いたり、自分の考えを述べたり、そのコミュニケーションによって当事者意識が形成されるのではないかということです。

もう一つは協働です。「きょうどう」に当てられる字は三つあり、今日テーマにしているのは「協働」です。あえて定義付けるならば、自分たちでその目的に向かって、自分たちができることを持ち寄り、力を合わせて物事を行うことです。特に、何か一緒にやっていくこと、一緒に汗をかくことが、おそらく協働だろうと思います。単に自分の役割を果たすだけでなく、一緒に何かをやっていくプロセス自体が当事者意識の醸成につながっていくのではないかというのが、私たちが感じていることです。

ちなみに協働の反対語は、ある本によると無関心だそうです。関心を持たないことが協働の反対語だと言われています。私たちも、フューチャーセンターでいろいろな場所に呼んでいただき、静岡大学の中からいろいろな地域や人の課題について考えています。関心を持つことが第一歩であり、対話し、何かを一緒につくり上げていく中で、当事者意識が生まれていきます。そのような人たちが地域に一人でも多くなれば、地域課題の解決につながっていくのではないかと感じているところです。

## 報告 3

## しずおかキッズカフェ

小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

## 1. 自己紹介

静岡大学人文社会科学部3年に所属し、「しずおかキッズカフェ」の代表を務めております小林タバサと申します。実は2年前に、阿部先生の「地域連携論」という集中講義を受けました。それがきっかけで、阿部先生のゼミ生、人文の学生も交じって、東伊豆町稲取のフィールドワークにも参加しています。

2017年夏には、静岡県版の「トビタテ！留学JAPAN」の留学支援制度を利用して、ドイツの子ども食堂で2カ月間のインターンを経験しました。

## 2. 子ども食堂立ち上げのきっかけ

なぜ子ども食堂を立ち上げたのかとよく聞かれます。いろいろなきっかけがありますが、一番は自分が中学時代に不登校だったことです。学校に行かずにずっと家に引きこもっていたので、外に出て同級生に会うのを恥ずかしく感じていました。勉強する気はあり、元気もあるのですが、家に引きこもる生活をしていた時期があり、当時から家でも学校でもない第三の居場所が地域にあればいいという気持ちがありました。

静岡大学に入って1年目のときに、食を通して何かをしたいという気持ちから、地元の静岡市にある二つの小学校でアンケートを実施しました。その結果、土曜日は給食がないため、食事を抜いていたり、スナック菓子でごまかしたりしている子どもたちが多いということが分かりました。そこで2016年3月に、「しずおかキッズカフェ」を立ち上げる決心をしました。月2回、通常第2、第4土曜日の昼食を、子どもは無料、大人は300円で提供しています（図1）。気が向いたときに立ち寄



図1 昼食の様子

れる居場所として、若い親子でコミュニティに賑わいが創出されつつあります。食べ放題形式でやっており、毎回50~70人の地域の子もたちやママ、パパたちが来てくれて、多いときは100~120人ぐらいいらっしゃるのですが、入りきれなくて外で待ってもらってしまうこともあります。地域の有志のボランティアの方々が調理して、提供しています。

大学1年生のときに立ち上げたのですが、最初は地域の方々の信頼を得ることが難しく、場所を見つけることにも苦労しました。資金もなく、食材をどう調達すればいいかも分からないような状況で、まさにゼロからの出発でした。初めのうちは閉店した喫茶店や本屋さんを、時間単位でお金を払ってお借りしていたのですが、食器、食材、料理を運び入れるのがすごく大変でした。雨の日は運搬だけでなく濡れになってしまうので、拠点を持たなければ安定した活動ができないと思いました。そこで2年前からは、すずらん通り商店街の空き店舗をお借りして展開しています。家賃の他に光熱費、水道代なども必要なので運営面が厳しいことは確か

すが、地域の方々が理解してくださり、皆様のご協力とお力添えによって活動が成り立っています。

自分が不登校の経験があり、また子どもの孤食に関心があったので、当初は子どもの居場所づくりを目指していましたが、活動をする中で、子どもの課題は親抜きでは解決できないと考えるようになりました。自分は学生なので、子育てする親の大変さをまったく分かっていなかったのです。子どもが5人いるのに、パートやアルバイトをしていないという理由で、一番下の赤ちゃんを保育園に入れてもらえないという待機児童問題があったり、離婚して一人で子どもを養育しなければいけない家庭があったり、産後うつにお悩みのお母さんたちなど、さまざまな家庭が自分の地域にあることに気づきました。こうして、子どもだけではなく、親も含めて子育てを地域で支援する取り組みへと、徐々にビジョンが変わっていきました。

### 3. 「しずおかキッズカフェ」の活動

県内に子ども食堂はいろいろあると思いますが、「しずおかキッズカフェ」が大切にしていることは、ただ食事をする場所で終わらせないということです。季節ごとにいろいろな野外イベントをやっているのですが、例えば毎年秋には、耕作放棄地をお借りして、柿畑での柿狩りイベントを開催しています（図2）。その他に、サツマイモ、ソバ、ジャガイモなどを育てていて、子どもたちと収穫体験したり、<sup>かかし</sup>案山子を作ったりしています。



図2 秋のイベント「柿狩り」

2018年の夏に挑戦したのは、キッズカフェ独自の防災訓練です。千代田消防署の全面協力で、起震車と消防車2台を子どもたちにはサプライズでお呼びして、地震が発生し子ども食堂から出火したことを想定した防災訓練を実施しました（図3）。「しずおかキッズカフェ」には、米などの食料はもちろん、大きな鍋や炊飯器、大量の食器があるので、災害が起きたときには絶対に活用できると思っています。子ども食堂を災害時にも役立てていけたらと思っています。



図3 防災訓練の様子

また、夏のイベントとして流しそうめん大会をやっていて、毎年、地域の方々が大勢来てくださいます（図4）。支援者の方々にはそうめんやドリンクを寄付してくださる方や、キッズカフェのためだけにわざわざ山で竹を切って来て準備をしてくださる方もいらっしゃり、こちらのイベントも地域の方々の善意と協力によって毎年実現しているものです。



図4 夏のイベント「流しそうめん大会」

「しずおかキッズカフェ」はNPOではなく、完全に個人でやっているものなので、資金繰りがすごく大変です。そこで2年前に、ひらやま新茶「瀬名姫」というお茶の商品を開発して、寄付

付き商品として販売しています。ティーバッグ10個入りで500円の商品です。これは私が大学1年生のとき、キッズカフェをまだ立ち上げていなかったころからすごく手伝ってくれた茶農家の茶葉を使っています。イラストは静岡市在住の漫画家・ごとう和さんに依頼しました。瀬名姫は徳川家康の正室で、2017年の大河ドラマで菜々緒さんが演じられており、ご存じの方も多と思います。自分が瀬名で活動しているので、地域にゆかりのある「ゆるキャラ」のようにできたらいいと思っています。商品の裏には静岡大学名誉教授、小和田先生のコメントも付いています。



図5 寄付付き商品の開発

しかし、この商品をどう若者に売ることがネックでした。静岡大学で2017年に開講されたお茶についての学際科目で、他の学生を巻き込んでアンケートや試飲を行い、この「瀬名姫」を2018年、静岡大学の生協で試験的に販売してみたのですが、全然売れませんでした。また清水港で、豪華客船の観光客に向けて時々販売しています。そのほかには、JR静岡駅のグランドキヨスクさんで販売させていただいていることもあります。年末年始にも販売することが決まっているので、その時期にグランドキヨスクさんにお立ち寄りの際は、ぜひ商品をご覧ください。

#### 4. 活動の成果

このような活動をしていると「すごいね」「偉いね」「大変だね」とよく言われますが、実感としてはありません。私の活動は、好きなことをさせてもらっているだけで、良いことをしているというエゴは持ってはいけないと思っています。いつも支えてくださる周りの方々への感謝しながら、好きなことをやらせていただいております。

自分一人でできたとは思っていません。地域の大勢の方が私をサポートしてくださっています。静岡大学人文社会科学部長の日詰先生が理事長をされている「フードバンクふじのくに」様が食材を提供して下さいますし、その他にもいろいろな地域の企業や団体、個人の方々からご支援をいただいています。

私は不登校で地域のことを嫌がっていた時期もありますが、地域とはこれほど温かい場所であること、自分の地元には見守ってくれる大人がいるということに、自分自身が気づくことができ、そしてそれを周りの若者や親子に示せたということが、自分がこの活動のなかで一番達成できた成果だと思っています。

「しずおかキッズカフェ」の子ども食堂の活動は今後も続けていきたいですし、子ども食堂ができること、地域防災や子育て支援などを今後も模索し続けていきたいです。また、お茶にも関心があるので静岡の茶業の振興や、清水港を中心とした静岡のツーリズムなど、グローバルな視点からこれからも活動を継続していきたいと思っています。

報告 4

# 被災地に緑を！～全国の農業クラブと挑戦した環境保護活動～

望月基希（静岡県立富岳館高等学校教諭）  
 新井隆一郎・清水大世・笠井愛莉（農業クラブキノコ研究班）

（望月）

静岡県立富岳館高校教諭の望月です。ここにいる3人は生徒です。これから二つの構成でお話しします。私たちは農業の学びを通じた地域貢献活動をしているので、その研究を生徒から発表し、その後、学校としての農業教育の取り組み、姿勢、方向性などを私から説明します。

## 1. 農業の学びを通じた地域貢献活動

（新井）

私たちは静岡県立富岳館高校農業クラブキノコ研究班です。現在、注目されている新たな植物成長調節物質を活用し、東日本大震災の津波被害を受けた地域の緑化活動を行っています。キノコ研究班は、平日の放課後や休日の時間を活用して活動しています。それでは、私たちの活動内容を発表します。

2011年3月、東日本大震災が発生しました。震災から7年、被災地は復興への道を歩んでいます。現在、東北沿岸では津波被害を受けた堤防の緑化活動が行われています。しかし、海岸で見られる塩・乾燥ストレスが法面のシバの生育を抑制し、復興の課題となっています。

そんな中、私たちは植物ホルモンの授業の中で、現在、注目されている新たな植物成長調節物質アザヒポキサンチンAHX (2-Azahypoxanthine) や代謝産物AOH (2-aza-8-oxohypoxanthine)、フェアリーリングのシバを枯らすICA (Imidazole-4-carboxamide) の実用化について学習しました。私たちは、新たな植物成長調節物質を活用し、東北の緑化を実現できないかと考えました。

2015年から被災地を緑にする復興プロジェクトが始まりました。授業の学びから応用研究までの計画を立てました。三つの植物成長調節物質が植物に与えるストレス耐性を検証、AOHの可能性を確認し、AOHを安定的に供給する媒体を検討しました（図1）。授業の中で有機廃棄物の効率的な利用について学習したことから、地元製紙業の廃材「ペーパースラッジ」に着目し、炭化ペーパースラッジにAOHを混合したAOHチップを考案しました（図2）。AOHチップによる耐塩性を確認した結果、無処理区は塩ストレ

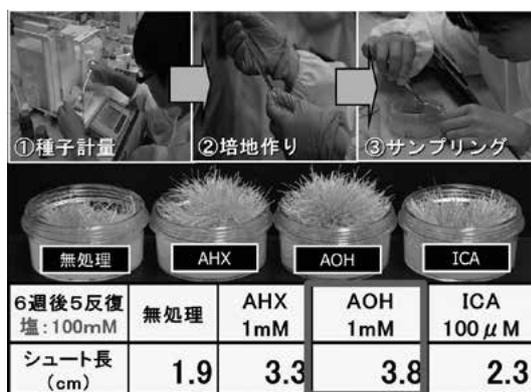


図1 植物成長調節物質が植物に与えるストレス耐性の検証



図2 地元の廃材を活用した媒体を開発

スでシバの成長が衰えたのに対し、AOHチップ区では高い成長効果を確認しました（図3）。

また、乾燥耐性も検証しました。5週間シバを培養したところ、処理区では無処理区に比べ、ストレスの影響を軽減できました。特にAOHチップ区はAHXチップ区に比べ、平均してシバが成長しました（図4）。この要因として、AHXはAOHへの代謝能力に個体差が見られたのに対し、AOHは代謝産物そのものであるために、シバへの効果が高く現れたことが考えられます。さらにAOHチップ区のシュートからAOHを検出、成長の要因であることが分かりました。以上のことから、AOHチップがシバにストレス耐性を与えることを確認しました。

次に、チップの機能性を考えました。AOH供給量は20  $\mu\text{g}$ 、土壌への最適混合割合は10%であることを認めるとともに、固形のAOHチップとすりつぶしたチップからAOHを抽出しました。その結果、すりつぶしたチップからのAOH抽出量が多かったことから、AOHチップはAOHを徐々に放出するエコ資材として機能することが分かりました。

その後、被災地での試験を行いました。授業を通して、生態系や全国の農業クラブとの交流の必要性を学んだことから、国や県外の農業高校に働きかけ、宮城県鳴瀬川の堤防の法面緑化にAOHチップを試験、石巻市沖の金華山に自生している「金華シバ」の採種を行うとともに植栽しました。その結果、チップによるシバの被覆向上率アップに成功するとともに、現在もシバ生産者と苗を養生・管理しています（図5）。さらに津波堆積土でのAOHチップの効果を模索するため、現地に海水を散布し、順調な生育を確認しています。

また、緑化技術の向上にも努めました。宮城県女川町の林道の法面緑化に挑戦し、岩盤に苗を生育させるため、AOHチップを含む苗のブロックを現地に試験設置、現在、良好な生育を示しています（図6）。

全国の農業高校生と共に、法面緑化で被災地を守るプロジェクトも具現化しました。

その他、自分たちの活動を紹介する新聞の発

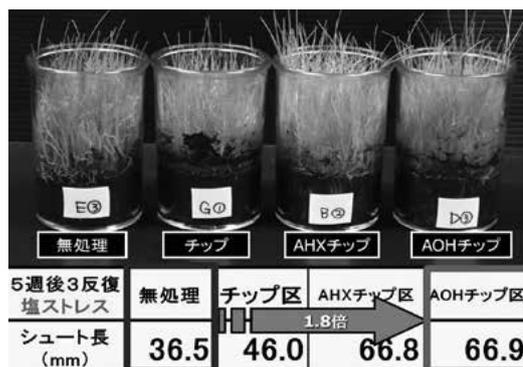


図3 AOHチップによる耐塩性実験

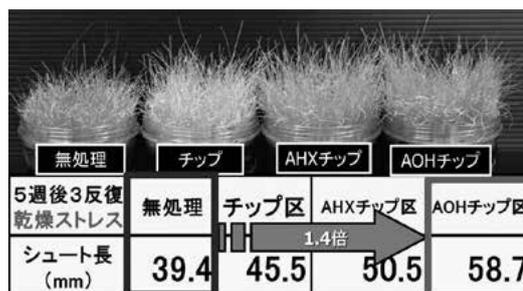


図4 AOHチップによる耐乾燥性実験



図5 シバの植え付け、養生



図6 林道の法面緑化に挑戦 (宮城県女川町)



図7 塩害条件下での稲作生育試験

行や、NPOと連携した被災地へのエコ授業にも力を注ぎ、津波被害に遭ったサクラにチップを活用することで除塩の効率化に成功するとともに、2018年4月にはサクラの再生が実現しました。

さらに、塩害条件下での稲作を試験しました。ワグネルポットにチップを施すことでイネの収量が向上し、水田の環境保全機能回復の可能性を見出しました（図7）。

この取り組みは海外へも波及しています。世界の塩害・乾燥地は日本の国土の7倍です。グローバルな気候変動でスーパー台風の高波や砂漠化が加速する中、私たちの活動を台湾高校生に紹介し、エコ授業を進めています。さらに2017年夏にはモンゴルを訪問し、塩害・乾燥地の緑化について、現地の高校生と意見交換を行いました（図8）。



図8 モンゴルの高校生と意見交換

2018年3月、私たちのエコ活動が評価され、国土交通省から「災害復興マーク」の使用権をいただきました。富士宮から被災地へ、被災地から海外へ、海外から富士宮へと、私たちのエコの環が広がっています。

最後にまとめとして、これまでの研究成果を説明します。一つ目に、全国の農業高校生と連携してAOHチップを被災地に試験活用し、生物多様性に配慮した保全活動を行いました。二つ目に、海外やNPOと連携したエコ活動を実践しました。三つ目に、地元富士宮でチップを活用した環境保全を発信しました。

現在の取り組みと課題は、AOHチップの検証から、現在行っている青森県種差海岸や、地元の緑化試験を拡大すること、そして、塩害水田の収量アップの検証を進めていくことです。

私たちの取り組みは、被災地から生物多様性に配慮した緑地帯を誕生させる「地方創生・復興プロジェクト」です。本研究は、静岡大学農学部の河岸先生、崔<sup>チェ</sup>先生、生物化学研究室の皆さまをはじめ、多くの方々にご指導をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

## 2. 本校の取り組み、姿勢、方向性

### （望月）

富岳館高校は創立118年を迎え、地域では最も歴史と伝統のある学校です。元は富士宮農業高校でしたが、2002年に総合学科高校として富岳館高校に変わりました。総合学科高校は、現在、県内に10校あります。従来は普通高校と専門高校の2種類に分けられたのですが、第3の学科ということで全国的に総合学科高校が誕生しました。本校では1年生のときに自分の適性を考え、2年次から自分の適性に合った系列を選んでいきます。

本校は7つの系列を用意しています。普通系列として、文系の国際教養・社会科学、理系の自然科学の三つがあります。専門系列としては、農業科領域の生物生命、工業科領域の工業テクノロジー、商業科領域の情報ビジネス、福祉科領域の健康福祉、以上の四つの系列があります。本日、発表した生徒は生物生命系列、農業科の領域の研究活動をしています。

生物生命系列の生徒たちは、座学で理論を勉強します。また、学校には農業用水が流れており、田植えや収穫などの実習をしながら、知識だけではなく技術的なことも総合的に勉強しています。

学習指導要領として、授業で指導する方向性が文部科学省から示されていますが、その中に「プロジェクト学習」があります。いわゆる研究活動ですが、課題解決型の学習で教科農業に位置づけられており、各科目の中で授業実践しています。そして専門教科の可能性を広げていく

ことが文部科学省から示されています。

先ほど生徒が発表したAOHチップですが、静岡大学農学部の河岸先生が開発した植物成長調節物質のフェアリー化合物と、炭化ペーパースラッジを組み合わせたものを使って、東北の緑化を行っています。AOHと同じシリーズのAHXと炭化ペーパースラッジを組み合わせてチップを作り、これを使って被災地の緑化や富士山の緑化(大沢崩れ周辺)、トマト栽培での収量がアップの検証を行いました(図9、10)。生徒たちはいろいろなアイデアを出しながら、課題に取り組んできました。

私は富岳館高校の前は静岡農業高校で教えていました。静岡農業高校では「静岡のワサビを守る」研究を指導しました。ワサビは冷涼地でなければ生育できないのですが、最近、地球温暖化が進み、ワサビ栽培が難しくなっています。そのような中、生徒とワサビ田に行くと古いハウスの骨組みがあり、驚きました。安倍川の上

流、有東木の農家の方にわさび田で見たハウスの話を聞くと、冬場は雪から守るため、夏場は害虫防除のためにハウスを使うことを聞きました。しかし、夏場はハウス内が高温になる課題があります。生徒はハウスを温暖化対策に使えないかと考えました。そのとき注目したのが光触媒です。

光触媒は太陽光の紫外線に反応して、親水性と分解性の二つの効果を示します。生徒は光触媒の親水性を利用することにしました。ハウスの屋根に光触媒を塗布して水を掛けると、水がハウスの被覆資材になじみます。そしてハウスの水の蒸発潜熱で温度を下げられないかと考えました。車のサイドミラーには防曇効果を得るため、光触媒が塗られています。この原理を使うために、授業の学びを生かしながら、ワサビ田で生徒とハウスづくり(2棟)を行いました。

光触媒を塗布したハウスと塗布しないハウスをつくり、両ハウスの上部に散水ノズルを付けて実験したところ、光触媒を塗布したハウス内の温度は下がりました。ワサビの生育状況も、無処理区は高温のために日焼けが起きましたが、処理区ではあまり日焼けが発生しない効果が現れました。生徒がフィールドに出て実践活動をする中で農家の方と関わり、農家の方から、農業高校生の手で産地保護したことに感謝していただきました。その結果、生徒の意欲もわいていきました。

### 3. 課題研究型プロジェクトは生徒の成長を促す

高校の授業で実践していますが、大学など、普段、高校生が関われないところで専門的・先端的な勉強をさせてもらい、それを高校の学習と併せてフィールドで実践した結果、生徒の意欲がわいてきます。課題研究型のプロジェクトは生徒の可能性を伸ばしてくれると思っています。

今、生徒は大学の先端部分を勉強していますが、専門系の高校として意識しているのは、大学との関わりの中で基礎研究を体験させてもらうことです。そして、応用研究において、農家



図9 紙ポットを使った富士山の緑化



図10 AHXチップのトマト栽培への応用

というフィールドで高校生なりのアイデアを考え、実践していくことです。

また、活動するときには研究費が必要です。活動初期は助成金を申請します。高校生や地域貢献のための助成金に応募して活動資金を得ています。次第に活動が軌道に乗っていくと、生徒が頑張ったことを「報告」という形で学会や研究大会で発表します。賞を取れば賞金がもらえますので、それを活動資金にしています。学会発表、特にポスターセッションは、生徒にとって意義深いと思っています。高校生の健康的な競い合い、高め合いが生徒の意欲を伸ばすと思います。生徒は学会発表の数をこなしていくにつれて、人前で話すことに慣れ、積極的になり、普通に自分の意見を言えるようになります。それが当たり前になり、楽しくってくるなかで、生徒が急速に成長していきます。



図11 世界大会での発表の様子

先ほどは口頭発表の形式で発表しましたが、ポスター発表では発表者と聞き手の距離が近いので、多くの質問が来ます。生徒は最初ひるんでしまうことがありますが、だんだん答えられるようになっていきます。このような経験を積むことで、国際的な大会に出て、発表することができました(図11)。

これらを通して、生徒の潜在的、科学的なリテラシーが高まると同時に、社会科学の意味での成長、人間的な成長が見られます。研究発表をすると、自分たちがやってきたことが科学的に評価され、それが一つのバロメーターになるとともに、「こうしたらいいのではないか」「こういう見方はどうなのか」と新しい視点をアドバイスしてもらえる場でもあります。これは教育という意味で、非常に可能性があると思っています。

アサヒビール主催の若武者育成塾等は研修型の大会です(図12)。応募して選ばれた数チームが合宿に参加し、育成されます。全国の高校生と交流して、新たな友情やつながりができていきます。その中で、高島屋と神奈川中央農業高校と連携し、富岳館高校で育てたトマトのソースを使ったハンバーグの惣菜を、お中元やお歳暮として出して5年目になります。生徒へのアンケートでは、環境、科学的なこと、プレゼンテーション、将来の生き方も含めて、取り組み前より知識や意欲が高まったという回答を得ました。



図12 合宿形式の研修会で他校の高校生と交流

大学の先生の協力を得て、専門の高校生としてのアイデアを出し、農家やフィールドの方に提案していくプロセスを経て、社会に通用する人間力を育成できると思います。いろいろな可能性を秘めている高校生が、高校では味わえない大学での先端的な研究に携わり、触れ、体験して自分たちのアイデアを広げていきます。さらに農家の方と触れ合い、本物の農業を体験するプロセスで活動を発表し、プレゼンテーション能力が高まります。このような総合的な取り組みが生徒の成長を高めると信じて、教育活動に励んでいます。

本校の取り組みについて発表しました。河岸先生はじめ大学の先生方、農家の方、NPOの方など、いろいろな方と関わることで今があると思います。本当にありがとうございました。

## パネルディスカッション

**阿部**——残りの時間はパネル・ディスカッションという形で進めていきたいと思います。最初に、課題提案者として、東伊豆町の地域おこし協力隊員であり、かつフィールドワークの受け入れもいただいているローカルデザインネットワークの荒武さんから、簡単な自己紹介をお願いします。

**荒武**——今ご紹介いただきました東伊豆町から参りましたNPO法人ローカルデザインネットワークの荒武と申します。私は、杉沢が発表した学生団体「空き家改修プロジェクト」を立ち上げて、大学院生のときに東伊豆町の稲取で空き家を改修する活動をした流れで、東伊豆町に移住しました。そういう立場だからこそ、うまく地域の中で立ち回ることを考え続けています。今は、「空き家改修プロジェクト」の学生たちが東伊豆町に来るときのサポートや、静岡大学の地域創造学環の学生がフィールドワークで来るときの受け入れ支援や、地元の人たちと地域外の人たちが活動するときに、うまくいくように応援するような仕事をしています。

**阿部**——フロアから質問をいただく前に、取り組みからするととも20分ぐらいでお話しできないような内容を、かなり圧縮してお話いただいたので、補足したいことがあるのではないかと思います。報告者同士が今回初めて出会ったという場合もありますので、他の方々に質問がありましたら、それも含めて報告順にお話しいただけますか。深澤さんの方からよろしくお願いします。

**深澤**——大学生が伊豆半島に入るということは、そこにいるおじいちゃん、おばあちゃんも含めて、その世代の人たちと会話をする機会すらない地域の人たちにとっては、すごく新鮮です。そういう意味では、地域の活力を学生の力を借りて上げているということが実際にあります。先ほどの空き家改修でもウィンウィンということがあったのですが、関わる人がみんなウィンになる形にできるのではないかという気がしています。先ほど宇賀田先生の報告にあったように、学生が鏝、ハブになって地域のつながりができ、学生が来ることによってもう一度自分たちを見直す機会ができたのが、僕らとしてもすごく良かったです。

普段、商店街の振興もフィールドワークでやってもらっているのですが、商店街の担い手がいなくて自分の代で終わりだとか、子どもには継がなくていいという思いを持っていた人が、学生がヒアリングに来ると、自分の店のこともいい格好をして話をするようになって、自分で話しているうちにその職業自体を、そんなに悪くないなみたいに思うようになったケースもありました。それはすごく大きな刺激だと思っています。今回、大学のない地域へのフィールドワークということで、いろいろ関わっていただいている中では、まだ細々であるとは思いますが、もっと可能性が広がるチャンスを秘めていると感じています。

**宇賀田**——今日のように、小林さんや学生が実際にやっている活動を、リアルに聞くのは楽しいなと思います。それを聞いて、今フロアの皆さんは、「あんなこと、自分ではできないな」と思ったり、「でもちょっとやってみたいな」と思ったりすると思います。やはり一人でやるのはなかなか大変ですが、実は声を出していくといろいろな大人が手を差し伸べてくれて、そこからまた見える景色があります。フューチャーセンターもそんな場でもありたいと思っているので、ぜひ何かやりたいな、何かよく分からないけど少しのぞいてみるかなという、一步の行動につながったらいいなと思いました。

**増田**——先ほど報告し忘れたことがあって、大事な開催予定を皆さんにお伝えしていませんでした。毎月第二水曜日の18時から、共通教育C棟4階の宇賀田先生の研究室で行っています。また、Facebookもやっているの、ぜひとも皆さん、「いいね！」をよろしくお願いしますとい

うのを忘れていました。

年の近いタバサさんに質問します。活動を始めるときは、自分もそうなのですが、何かグレーションがあるのかなと思っています。課題に気付いて、「よっしゃ、やるぞ」といきなり始められる人は少ないのではないかと思うのです。タバサさんにとってのハードルは何だったのかを聞けたらいいなと思っています。

**小林**——私は大学に進学することを考えたときに、最初は静岡にいたくないと思っていました。漠然と東京に行って、将来就職も東京でするものだと思っていました。でも、いろいろなことがきっかけで地元の静岡大学に来ることになって、地元で活動もすることになりました。やはり自分が不登校を経験したことが大きかったと思います。不登校の子どもたちを理解できる、それを自分の個性として、地域での活動に活かしていけるということが、個人的にはきっかけだったのかなと思っています。

**杉沢**——僕が「空き家改修プロジェクト」に入ったきっかけは、当時はもう「空き家改修プロジェクト」が進められていて、ポスターが学校に貼ってあり、そのポスターが星空と風車だけのポスターで、なんていいところがあるんだと、最初は不純な気持ちかもしれないけれども、観光目的というか、景色がきれいなところに行けるなら、無料で行けるしいいかなと思ったからです。

実際に行ってみると、土地の魅力はあるのですが、半面、社会的には人口減少が進んでいて、村の存続に関わるような、大きい問題があります。現地に行ってその魅力に気づくと、当事者意識が芽生えて、どうにかならないかと思ったり、先輩たちが結構頑張っている姿を見て、自分たち学生にもこんなことができるんだと実感させてくれる環境ができていたので、そのまま空き家改修プロジェクトを続けています。

ポスターの星空がたくさんあったところは、徳島県の木沢です。空き家が幸運にも景色のいいところとすごく接点が多くて、稲取もすごく景色がいいし、他の地域も魅力がたくさんあります。だから、行きながら自分たちで魅力を発見して、その村をどうにかできるように頑張っていくとことがあります。先ほど話したように、日常の生活を見ることができないのではないかと思います。そういうところを発信できるといいなと思いました。

そういう意味で、小林さんのキッズカフェ、子ども食堂も地域の人が使う居場所で、それが実際にあると地域の魅力を発信できるのではないかとあって、すごく参考になりました。

**荒武**——阿部先生にこの授業のお話をいただいたときに、「空き家改修プロジェクト」の後輩になる学生が話すことはできないかと紹介した経緯があります。僕もそうですが、大学生から繰り上がりで、そのまま地域に入ったという人間が皆さんに話すことが大事かなという気がしました。杉沢の発表の中にありましたが、建築学科でこんな勉強をしていて、大学の課題はこんな感じでやっていると、多分皆さんがやられていることは全然違うフィールドのことをしています。別分野で地域に入っている人が、どう地域を見ているのかという話をしてもらえるといいなと思いました。彼は、最初は観光気分で行って見たが、どんどん地域の魅力にはまっていったと言っていました。根本的なところは、ひょっとすると別領域で入っています。今日も、高校生の皆さんは、農業というキーワードで多分地域に入られているのだと思うのですけれども、根本的なところをひもといていくと、地域に関わり続ける動機はみんな似ているのではないかとあって、杉沢をここに紹介しました。

**望月**——先ほど生徒が発表しましたが、「農業クラブ」の説明が足らなかったのを補足します。クラブが付いているので部活動の一種かと思われるかもしれませんが、「農業クラブ」は全国の農業関係の高校で行っている教科「農業」の教育活動になります。教科指導の一環で、部活とは異なります。年に1回、全国大会を開催し、農業の専門学習の成果について、競い合いをします。

そして、生徒間の交流を行います。農業関係高校独自の教育活動と理解していただけばよいと思います。

生徒は地域連携や地域で活動します。学校内の授業では、教室に教師がいて、生徒がいて、その空間の中で生徒の可能性を伸ばしていくわけですが、学校外に出ることによって生徒の可能性をより引き出すことができます。

例えば、先ほどの研究発表を例にすると、大学の先生と触れ合う、東北の被災地の方と交流する、国土交通省やNPO、農家の方と関わります。いろいろな方と関わって、アドバイスをもらいながら活動することが高校生にとって貴重な経験になります。これが地域貢献型の課題解決型学習の大きな魅力だと思います。学校外の教育資源を活用し、課題解決していく中で、生徒自身の可能性も高まっていく。そして、地域も活性化していく。このような教育効果が期待できます。教師は、生徒の自主性を重んじながら、教育活動をコーディネートしていきます。本事例を実践し、生徒を指導をしていくなかで、教師としての新たな役割が見えてきました。

**阿部**——質問をしたいという方もたくさんいらっしゃると思います。ここでフロアから、挙手していただいて、どの報告者、パネリストの方への質問かも併せてご発言いただければと思います。

**質問者（学生1）**——地域創造学環3年生です。小林さんに質問です。同じ3年生として取り組みがすごいなと思いましたが、小林さん以外に、静大生でも県大生でも学生が携わっている中で、どうやってこんなに多くの支援を集めたのかが気になったので教えていただけたらと思います。

**小林**——よく、人文や学環の学生からレポートの課題のために「見学させてください」というメールをいただくのですが、残念なことに人手が足りなさすぎて見学に対応しきれないので、ボランティアに来てもらっています。食事の後に聞きたいことに応じるという形で学生を受け入れています。今月も静岡県立大学、常葉大学、静岡大学から来てくれました。わずかですが、授業の課題がきっかけで来てくれた後も興味を持って来続けてくれている学生さんもなかにはいます。でもボランティアとして参加してくれる学生さんの数は少ないのが現状です。

キッズカフェが静岡大学から少し離れている場所にあるので、私もそう簡単に呼びかけられないのです。それに学生は勉強やアルバイトがありますし、割と大変なボランティアなので。基本的に手伝ってくれるのは地域の方です。

どうしてこんなに支援が集まったのかということについては、NPO法人化していないので本来は自力でやるべきなのですが、それができないのでお願いせざるを得ないのです。こちらからお願いして支援をいただくこともあれば、新聞やラジオで取り上げていただき、それを見たり聞いたりした方々がお問い合わせをくださり、中には段ボールいっぱいジャガイモやニンジンを送ってくれる支援者の方もいます。支援の在り方はいろいろあって、お金だけではなく、人手が足りないときに来てくれるのも一つの支援だし、あと不要品をくれるのも支援の形です。気にかけてくれることも支援だと思っています。支援の輪が広がったのは、困っている私の姿を見て放っておけない優しい大人の方が助けてくれたということだと思います。

**阿部**——他にいかがでしょうか。

**質問者（学生2）**——人文社会科学部経済学科1年生です。富岳館高校の皆さまに質問です。研究していく中で、AOHを使用する前と使用した後の結果にすごく差があり、そういう目に見えた結果が表れたら今後も続けていこうというモチベーションにつながっていくと思うのですが、研究中にいろいろな困難、壁に遭ったときはどのようにモチベーションを維持しているのですか。

**望月**——本日、研究発表した内容は、生徒がいろいろな活動している中の一コマです。実際に

うまくいって効果が出た部分を発表していますが、試行錯誤していますので、失敗し、効果が出なかった例はたくさんあります。例えば、ストレス耐性を高める検証では、AOHはすべての植物に効くのかということではなく、効く植物と効かない植物があり、どのようなストレス耐性があるのかは、すべてが分かっています。ですから、一つ一つ検証が行われています。

当然、失敗すると生徒も落ち込みます。高校単独でやっていくと、落ち込んだままかもしれません。しかし、私が教育していていいなと思うことは、生徒が大学に行き、実験させると、大学の先生や大学院生、学生が生徒に指導してくれます。生徒からするとお兄さん、お姉さんに近い年齢の方が指導してくれます。たくさん実験を行っても成果がでないことがほとんどですが、時に良い結果が出ます。その可能性を信じて、実験します。そのようなことを大学生から教えてもらうことで、生徒のモチベーションが高まります。学校の外に出ていくことによって、多角的な刺激が生徒に与えられ、成長していきます。さまざまな方から多くの教をいただき、生徒が伸びていきます。それがモチベーションの維持につながると思っています。

基礎研究では以上の教育観を持って行っていますが、応用研究では、フィールドの方と多くの話をします。フィールドの方は何とかしてほしいという気持ちが強いので、生徒の可能性を信じて熱く接してくれます。生徒はそれに対して、自分たちも何とかしたいし、地域の方と一緒にやりたいという気持ちが醸成されます。相乗効果で生徒の気持ちが高まると思っています。**阿部**——他にいかがでしょうか。こちらの方で個人的にいろいろ聞きたいと思いますが、最後のご報告、富岳館高校の取り組みを知ったのは、実は農学部の河岸先生の研究室に、三保の松原の地域課題をもっていったときでした。

きれいに整備された松林には「松露」というキノコが生えることが多くて、その成分分析してもらいたいという話になり、課題提案者と一緒に河岸先生のところに行っているいろいろなお話をしたら、帰り際に「こんなことをやっている高校もある」と新聞記事を見せてもらって初めて知ったのです。

地域課題解決支援プロジェクトの説明や地域連携論などで、今までは、「大学と地域が関わってこんなことをやっている」と言うことが多かったのですが、大学にならないと始められないのかということ、全然そんなことはなくて、高校でこんな素晴らしい取り組みをしているという事例が、富岳館高校以外にも幾つかあります。ぜひ今回のシンポジウムで富岳館高校に報告いただきたいと思い、河岸先生に改めて、「あのときの指導者の先生の連絡先を教えてください」と尋ね、「望月先生だよ、静大OBだよ」と教えていただき、連絡を取り、かなり急でしたが、冬休みということで来ていただきました。われわれにとって非常に刺激になりました。ありがとうございました。

われわれにとってもそうですし、大学も、高校と大学の連携を進めようとしています。実際にどんなものが高大連携にカウントされているかということ、高校からの求めに応じて大学の教員が授業をするという形が多いでしょうか。リクエストに応じて、大学の教育・研究の成果を伝えるという意味では大事なこともかもしれませんが、富岳館高校の場合の高大連携は、本当に素晴らしいと思いました。河岸先生の研究成果を活かして、高校生がその指導を受けて実践されて、復興途中の被災地に役立つことを考えられたのは、とても素晴らしいと思います。

先ほどもご報告いただきましたけれども、どうしてそういうパッケージができたのか、本当に奇跡的なことではないかと思います。静大OBで農学部のご出身だったということもありますが、富岳館高校以前でもそのような取り組みをされたと伺いましたので、パッケージとしてそういうことを仕組みとして進める秘訣みたいなことがありましたら教えていただきたいです。**望月**——富岳館高校で被災地の緑化活動を行っています。私は地域連携型の課題解決型の研

究活動を、前任校の静岡農業高校で始めました。わさび田の生育を良くする、温暖化から守る研究です。キーワードは光触媒で、光触媒をやっている大学に連絡を取りました。

生徒にとって、大学は高校を卒業してから行く場所で、大学での学習内容は理解できません。しかし、光触媒を専門に研究している東京大学と関わりを持つことで、大学の研究の先端を生徒が感じとります。そして、研究に対し、積極的になり、生徒の能力が開花します。

大学は基礎研究をやっています。専門高校の強みは何か。専門高校の強みは農家との結びつきが強いことです。インターンシップなどを行っており、農家とのつながりは深い。基礎研究は大学、応用研究は専門高校、フィールドは農家、このつながりを大切にします。専門高校はフィールドとの距離が近いので、高大連携することによって、大学がやっている先端的な部分を高校生の手で農家に紹介する橋渡しができます。そのときに高校生が自分たちのオリジナルのアイデアを入れます。これが大きな道筋になります。

先端的な部分をどうやって知っていくのか。生徒には新聞を常に見るように言っています。そのような中、新聞で当時、注目されている新物質を知り、それがストレス耐性に強い効果を持つなら、新物質を活用できないかと生徒が思ったことが研究のきっかけです。新聞からヒントを得て、それを生徒が検証する。地元の富士宮は製紙業が盛んですので、その廃材のペーパーラッジに着目し、新物質とペーパーラッジを組み合わせるアイデアを考えて、フィールドに生かしていきました。

被災地への活動にどのように結びついたのか。生徒の交流活動で富士山の緑化やトマトの耐暑性を高める発表をしたときに、東北の高校から、被災地の緑化で困っているが、「富士山の緑化やトマトの耐暑性を高める研究で扱うストレス耐性」について被災地で生かせないかと相談を受けました。シバの研究で先進的な京都の桂高校もいて、3校連携の研究がスタートしました。連携の中で、新たな課題が生まれ、次の発展につながっていきます。一つの取り組みが次の取り組みにつながり、それが次の取り組みにつながっていったのです。

**阿部**——本当に地域密着型で、富士宮の製紙業の廃材を利用するとか、静岡大学は距離は少し遠いですが、その研究成果を活かすとか、地域密着でありつつ東北の高校と連携するというのも素晴らしいです。これまで、大学にはさまざまな研究分野の学生がいるので、それを活かした地域貢献活動をと考えて、高校はボランティアベースだと勝手なイメージを持っていましたが、まったく逆ですね。富岳館高校の取り組みの方が、自分たちが今専攻していることを活かしている感じがして、大学はもっと頑張らなければいけないと思いました。これはわれわれの怠慢です。いろいろありがとうございました。

続けてフロアからご質問がありましたらお願いします。

**質問者（学生3）**——人文社会科学部社会学科の1年です。松崎町の深澤さんに質問です。松崎町は観光地としてどんな人を呼び込みたいと思っていますか。2点目として、企業創業支援のまちづくりというお話があったのですが、どういう職種、どういう人たちに来てほしいですか。

**深澤**——観光客は基本的には幅広く、誰もが楽しめるというのが理想です。ある程度、魅力づくりをしていく中で、歴史と文化と豊かな自然を松崎町はテーマにしていますので、そういったものに興味を持っていただける方ということです。松崎町は元々風待ちの港で、江戸と上方をつなぐときの船の商業港として発展しました。いろいろな人が行き交う場所であったために、ある程度裕福な地域だった証があります。なまこ壁の建造物、白と黒のコントラストの壁の建物が結構残っています。古き良き日本の歴史の1ページみたいな感じで一応売っているのですが、中高年の方が一番多いです。

若い観光客が多いのはスポーツ関係です。オリンピック種目の自転車競技が静岡県で開催さ

れます。マウンテンバイクやトラック競技が伊豆市で行われ、その関係もあって松崎町で「山伏トレイル」を開催しています。昔、炭を運び出していた古道を整備して、そこをマウンテンバイクで下ってくるという、古道の歴史もガイドしながらやっているツアーがあります。今まで、冬の伊豆半島の観光は温泉と食事ぐらいしかなかったのですが、季節のいいときは長野、新潟、山梨で自然を使ったアトラクションをやっていた人たちが、伊豆なら冬でもできるということで流れてきています。当然夏はマリンスポーツです。伊豆半島はどこもそうですが、透き通った海にシュノーケリングやダイビング、シーカヤック、スタンドアップパドルボード(SUP)といったマリンスポーツが盛んです。

もっとそういうものを発信できるかなと思っています。世界を潜ったダイバーが、ここは素晴らしい所だと言うポイントが、伊豆半島には幾つもあります。そういうものがまだ発信しきれていないということがあるので、多年代の方を呼びたいといっていますが、基本的には今言ったマリンスポーツ系、アウトドア系で若い人、そして歴史と文化に根付くもので中高年の方々ということを考えています。

その延長線上に、将来的にはインバウンドです。オリンピックがありますし、伊豆半島ジオパークが世界認定を受けていますし、駿河湾は「世界で最も美しい湾クラブ」にも加盟しています。発信力をもっとうまく使えば、日本一の富士山を抱える静岡県ですので、人を呼べるのではないかと考えています。今試行錯誤中で探していることです。行動につなげるということが気になっていることで、行動経済学の関係もいろいろ勉強しています。

二つ目の質問ですが、起業や創業がなぜ必要かという、田舎は業種が限られてしまいます。東京一極集中という原因に、東京なら働くところがあるとか、東京に行けばお金が回るのではないかという、漠然としたものがあるのではないかと思います、実際に東京に行って成功している人もいれば、当然失敗している人もいます。

そんな中で、田舎でどうやって生業を持つかというときに、今までの農業とか、普通の旅館、民宿という形態でずっといけるかという、なかなか人も動かなくなっていて、ましてや日本全国人口が減っています。今までにない新しい事業、もしくは働き方をしないといけません。パラレルキャリアといって幾つも自分のキャリアを積んで、ダブルインカム、トリプルインカムで収入源を幾つか持つということで、田舎でも生活することができればいいという理想を持っています。

実際に農業もそうですが、1品目だけで生きていくのは、北海道のように大規模農業でないと難しいと思います。松崎町は小規模農地ですので、付加価値を付ける、ブランド化する、またはこの時期にこの農業、この時期は違う仕事、あるいは僕らが手掛けている半農半Xという事業を考えています。ITと農業、介護と農業、農福連携もあるのですが、そういう新しいパラレルのキャリアができればベストです。人手不足、担い手不足の穴を埋めるのに、松崎町ではどういう形でそれをつなぎ合わせるか、いわゆる隙間部分を埋めることによってより効率よく、長く働けるような起業、創業をしてもらえれば一番いいかなという考えです。起業支援などの補助金も、額は低いのですが、うまく商工業関係の機構なども併せて引っ張ってきたいと考えています。

地方のメリットは、一流企業の研修などでよく使われていることです。新しい柔軟な発想力を付けるということで、北海道の美瑛町でヤフーが会議をしていますし、最近JR東海が川根本町で研修をしています。松崎町でも2年ぐらい前にコニカミノルタが、ニューリーダーに柔軟な発想をさせるために、国がいろいろやってもなかなか答えが出ていない地域課題を、知恵を出して考えるという研修をしています。そういう意味では創業と起業というチャンスは地方

にもあるかと思っています。

**質問者（学生4）**——人文社会科学部学生です。パネリストのうち、現在、学生の方にお聞きしたいのですが、多くの学生はそういうきっかけがあったとしても、将来、就職の選択肢の方に響くと思うのです。こういうことがやりたいから、こういうところに就職しようとなると思うのです。皆さんはなぜ将来ではなくて、今やろうというふうになったのかがすごく気になっているので、そこを詳しく知りたいです。

**増田**——私は農業高校出身だったので、農業高校の中のプロジェクト学習の一環で地域に関わったというのが最初の入口です。そのときは、結構やりたいことをやろうみたいな高校生だったので、就職とか進学のことは頭になかった状態でした。高校生のときに会ったプロジェクトがすごく面白くて、私も一緒にやりたいとやっていたら、高校を卒業した今もそのプロジェクトで合同会社をやっているというつながりになっています。

私の場合は、先ほど出たようにパラレルキャリアを考えています。合同会社を続けながら、でもそれだと収入が不安なので企業で働いていきたいというところに今つながっています。「ライスワーク」ご飯のためのお仕事と、「ライフワーク」自分のやりたいことでお金を得る手法と、両方をやって何とか食べていこうというイメージを持っていたのは、高校生の4月に研究員であってしまったというところがスタートなのかもしれないとは、今質問を受け取って思いました。

フューチャーセンターに関しては、今一緒に合同会社をやっている人に紹介してもらって、最初は全然ディレクターをやるつもりはなくて、宇賀田先生のところに連れられて話をしていたら、当時高校生だったのですが、その日のうちに「2月にセッションがあるからおいでよ」と言われて、見学かなと思ってのこのこついていったら、「じゃあ、よろしく」という感じでした。そこで引っ張ってもらったということがあって、今も続いています。あまり今やっていることを仕事にしようとは私は思っていないです。お仕事は結局、物と紙きれを物々交換するためのお金を得るためのものであると思っています。そうではない人ももちろんいると思うのですが、私は将来、自分が何とか自分一人の力でご飯が食べていければいいと思っているので、お仕事をそれだけにしようとか、今やっている活動がそのままつながるようにしようとか、あまり考えてはいないです。

**杉沢**——あまり模範的な解答ではないと思うのですが、最初のきっかけは観光目的でした。行くと、地域は問題を抱えていて、おじいちゃん、おばあちゃんばかりなのですが、すごく寛大に受け入れてくれます。稲取も他の地域もそうです。そうやって稲取と月に2回ぐらい行き来しているうちに第二の故郷のような感じになって、自分のおばあちゃんよりも仲のいいおばあちゃんがいる、だんだんそこに行きたいという愛着がわいてきました。プロジェクトはもちろん大事なのですが、あのおばあちゃんに会いたいという気持ちがあってやっています。

自分の中で建築学科に入ったのは適当な理由で、元々整備士になろうと思っていたのですが、自動車が電子化していく中では整備士の需要が減っていくだろうと予想し、今後も人が住む住宅の需要は減らないだろうという、不純な理由で建築学科に入りました。すると学生生活が意味もないし、全然楽しくないのです。何か暇だなと思って、学生時代にいろいろ経験しておくことが大事だろうと思いました。実際に空き家を改築するとなったら整備士に近いものがあった、大作業をするのはすごく有意義な時間になって、学校の授業を真面目に受けてアルバイトするだけでもいいのですが、今は、課外活動で自分のためになることをして、それが地域のためになったらよりいいなと思って活動しています。

**小林**——私は「しずおかキッズカフェ」を大学に入る前の春休みに立ち上げました。今のご質

問にちゃんと答えられるかどうか分からないのですが、なぜ今かというのは、逆に今だからこそ、と思っています。宇賀田先生のお話にもあったのですが、学生だからこそ手を差し伸べてくださる大人がいるので、その絶好のチャンスを使わないわけにはいかないと思っています。

**阿部**——ずっと松崎会場で聞いていただいています菊池さん、そちらから質問をいただければと思います。

**菊池**——「空き家改修プロジェクト」の杉沢さんに質問です。深澤さんもお話しされていたと思うのですが、この松崎町は人口が減っていて、それと同時に空き家が増えているのが現状です。空き家を改修していく上で、それぞれの地域に合った空き家の改修の仕方や目的が異なっていると思うのですが、どの地域でも共通しているような、一番に大切にしていることなどがあればお聞きしたいと思います。

**杉沢**——各地域で活動していく中で、自分たちは大したことはできなくて、せいぜい学校でやっていることは図面を引いて模型を作るぐらいで、実際に大作業をすることはないです。やはり地元の方たちに協力してもらわないとできないことがほとんどで、あとは継続していけばしていくほど学生が入れ替わって、そうすると関係人口が増えるけど引き継ぎがうまくいかないということもあります。そういうときに荒武さんがいてくれて、すごくそこはスムーズになって、自分たちと地域だけの関係ではなくて、自分たちとその間を取り持ってくれる人が結構あるので、一番は人との関わりです。その地域の人たちが、違う地域の人や、例えば大工さんと呼んでくれたり、製材屋を紹介してくれたり、思わぬ出会いがたくさんあります。それが地域に入っていく楽しみでもあって、次はどんな出会いがあるのかということがあって、すべてがそれにつながっていくことです。決して空き家と向き合っているわけではないです。最初にあるように、地域活性化団体なので、空き家をただ媒体として、空き家を改修するという作業のために地域の人たちが入ってくれて、地域の人と成り立っているという現状があります。

**阿部**——今、ご報告いただいた松崎町と東伊豆町だけではなくて、フィールドワークのレギュラーな場所ではないのですが、南伊豆町にも入っているいろいろな活動をしています。皆田先生という地元学に詳しい先生が中心となって「ご当地かるた」を作っていて、そういう報告もぜひ紹介したかったのですが、また次回にしたいと思います。

では、全体のまとめの前に私から質問をしたいと思っています。地域課題解決支援プロジェクトとは関係なく取り組まれている小林さんですが、お話の中で個人的に非常に響いた点があります。この地域が自分はあまり好きではない時期があったと、そこにはいろいろな背景があるのだと思いますが、進学も就職も静岡ではなくて、東京に行こうと思っていた。でもそうではなくて、地元の多分住んでいるすぐ近くで子ども食堂をやり始めたら、地域の方々がいつの間にか支えてくれる。小林さんも地域の子もたち、あるいは孤立している親を支えている部分がありますが、地域と仲直りした。その地域に住んでいて、地域のいろいろな姿を知れて、ここにおいて良かった、この活動を続けたいと思っているということで、それはものすごく大事なことのような気がします。

私自身も地域づくりに興味・関心があることになっている立場にいますが、自分が生まれ育った新潟でそういうことをやろうという発想があるかということ、僕もここに帰ってくることはもうないだろうと思って大学に行きました。先ほどの話を聞いて、それでいいのかと思いました。私の場合は年齢的にもう遅いですが、学生の皆さんはある「地域」に住んでいます。地域連携論を受講するぐらいだから、地域づくりや活性化に興味があるかもしれません。しかし、その地域で何かしようという「地域」がどこになっているのでしょうか。自分が生まれ育ったその土地と関係を作り直す、その作業と並行してやれるような形になっているのか、小林さ

んの話が非常にずきっときて、それは課題だと今思っています。今はそういう問題に関してはどんなお考えなのか、もう1度お話いただけますか。

**小林**——高校生のときに、どこの大学に行くのかと生徒同士で話したときに、優秀な人は地元静岡を離れて、有名な都内の大学に進学するというパターンを見ていて、自分も勉強がそれなりに好きだったので、それにあてはまるのかなと勝手に思っていました。

私は大学に入る前に引きこもりのようなブランクの時期が3年ぐらいありました。引きこもりと聞くとすごくネガティブで、憂鬱なイメージだと思うのですが、実は家の中ではすごく活動的で、あの時期が一番勉強していたと思います。語学や文学など、好きなことを好きなだけ、気がすむまで勉強していました。

とはいえ、それでは地域とうまくつながりを持ってないと気付き、だからこそ社会意識、地域意識が芽生えたというか、反動みたいな感じでしょうか。実は地域こそが自分が求めていたものなのかなと思っています。

**阿部**——地域連携論を受講していた皆さんに、神山町のまちづくりの紹介をして、創造的過疎の話をしました。創造的引きこもりというのもあるのでしょうか。実際にその時期は大変だったのかもしれませんが、そんなお話をお聞きしました。

最後に、報告者の方、パネリストの方々それぞれにお話をいただきます。高校生の方々からも一言いただいてもいいですか。

**新井**——私は2年生です。プロジェクト活動として発表しました。今はヤーコンという健康野菜の栽培にAOHチップを活用した「農家の経営改善」のプロジェクト活動をしています。高校生は、大学の最先端の技術やどのような研究を行っているのか分からないことが多いです。そのような中、望月先生のご指導で、大学との連携が成り立って、とても奇跡的な状態の中で私たちは勉強しています。このようなシンポジウムを通して、将来の夢を決めるきっかけになればと思います。本シンポジウムは、私にとっては非常に良い経験だと思います。ありがとうございました。

**清水**——どの報告も自分たちが主体となって行っている活動で、私たちは何人かで活動しています。

**笠井**——2人は授業や部活動としても研究活動を行っているのですが、私は3年生になってから授業の一環として新たに研究チームに加わりました。今回のような発表もまだ2人のように慣れていません。

富岳館高校での農業の学習は動物専攻と植物専攻に分かれています。私は動物専攻で畜産学や飼育学です。私は畜産学を学習できる上級学校に進学しますが、植物に関する勉強や発表を、今後の自分の進路に活かせることがあるのではないかと思います。

今回、いろいろな地域貢献活動の発表を聞きました。私たちも発表しました。今後、私が勉強や研究を続けていく上でとても良い経験になりました。本日はありがとうございました。

**新井**——望月先生の話の中で、刺激の中で生徒が開花するという話があったのですが、私自身もそれを感じています。1年生のころはほとんど人前で話すことができませんでした。しかし、人前に立つ回数を重ねることによって、以前より話せるようになったと感じています。先生には感謝しています。

**阿部**——今度は逆回りで、望月先生の方からよろしくお願いします。

**望月**——今回このような発表する機会をいただき、ありがとうございます。私は農業の教師で、教職に就いて20年目ですが、プロジェクト型の研究は、前任校の静岡農業高校で始めました。最初は課題研究の授業が週2時間あり、その中で実施しました。活動を続ける中、生徒からさ

らに地域に出て行きたいという意見が出ました。目標を高くする中、授業だけだと時間的制約があって厳しい。生徒が地域に出ていき、地域から新しい課題をもらう中で、生徒がどんどん意欲を高めていきました。私たち教師もさらに刺激を受けて、もっと生徒にそういった学ぶ機会、学ぶ場を提供できないか、コーディネートできないかという視点を大切にしてきました。

静岡農業高校や富岳館高校での地域連携型の課題研究型のプロジェクト学習は、本当に可能性があると思いました。生徒にはいろいろな発見や生徒同士の交流があります。さらに、学校外の方と出会って新しい知識を得ることができます。他校でもプロジェクト学習をしており、教師は他校の指導者と交流し、全国に目を向けることができます。地域連携には生徒、教師、そこと関わっていただける方全体による相乗効果があると感じ、教壇に立っています。これからも頑張っていきたいと思います。

**荒武**——学生の中には、地域創造学環に所属してフィールドに入っている方や、他の学部の皆さんもいると思います。自分のしてきたことで、地域創造学環の学生の一つの答えになる道筋を示せるといいなと、静岡大学とお仕事する中で感じている部分があります。ただ、それはすごく極端で、卒業したらそのまま地域に引っ越して、そこで仕事を探っていくみたいな、あくまでもすごく極端な例ですが、示せるといいなと思ってフィールドワークの受け入れをしています。今は地域おこし協力隊といって、3年間の任期付きで行政からお給料をもらいながら、地域の課題解決に取り組んでいく仕事をしています。年度末の3月でその仕事は終わって、4月からは自力で頑張っていけないといけませんが、フィールドワークのお仕事も続けますし、そのまま東伊豆町に残って仕事をしたいと考えています。

今日のお話で、深澤さんの最初の話でぞくぞくときたのが、「答えは地域にある」と書かれているスライドがありました。何の答えかというのは、正直、人それぞれではないかと思っています。自分は就活で本当に一番行きたかった企業も落ちてしまって、他の企業も受けられども全然駄目で、結局最後に行きついたのが静岡県の東伊豆町、学生時代に関わっていた地域で、まだ続けられることがありそうだという形で入りました。それで自分なりの答えを探してみようというので、今は一つ答えが出ている状態です。それはすごく極端で、個人的には、地域での活動が就活のときにアピールするための活動だとしても、それは地域に関わったからこそ得られる経験だし、それによって自分の人生が開花していくという過程は、すごく地域にとってもほほえましいというか、うれしいことではないかと思えます。みんな悪い人たちではないと思うから、自分のためにしようとするのは、絶対地域のためにもなることだと思います。そこは皆さんがそれぞれ答えを出してもらえるといいのではないかと思います。こういう機会が、皆さんの中で何かしら新しい発見につながるようなヒントになるといいのではないかとあって、今日はすごく楽しく聞かせてもらいました。ありがとうございました。

**杉沢**——僕からは修士1年の先輩面して言います。芝浦工業大学はあまり真面目な大学ではないのです。僕は、大学院に進学するときに他の大学に行こうとしたのですが、そのことを恩師に言ったら、「大学院の2年間はそんなに勉強する場ではなくて、自己投資、経験をするための期間にした方が絶対にいい」と言われました。そのとおりだと思って、学生期間はすごく特殊で、就職してしまうと週に5日間働いて、2日しか休みがないとか、全然休めないしとか、やりたいことがあってもできない、お金はあるのだけれどもできないとよくいいます。ですから、学生の期間はすごく貴重な時間なので、こういう活動だけではなくて、自分のやりたいことをやっておくべきだと思って、例えば海外に行く、一人旅をする、趣味に没頭する、何でもいいと思うのですが、そこから見えてくるものが次につながると思っています。

僕は、休日はボーリングやカラオケに行くというよりは、男友達と2人で温泉に行って景色

を見るということが好きで、それが由来で「空き家改修プロジェクト」に入りました。空き家だけではなく、海外に修士で行っていろいろ気付くことがあったり、一人旅に行きたいと思ったらすぐに行ったり、そういう経験はすべて生きてきます。目的があって、そのためにすることももちろんあるのですが、やりたいからやってみて、それが後々つながっていくということがあるので、学生期間はほどほどに真面目にやって、あとはやりたいことをやった方が後々自分のためになるし、いい学生期間になると思います。

**小林**——今日は地域連携論の集中講義で来ている方も多いと思うのですが、私も2年前に受講して多くを学び、伊豆半島へフィールドワークにも行きました。いろいろなご縁がそこから生まれてきました。皆さんもいろいろな地域課題解決支援プロジェクトを見ていた3日間だったと思うのですが、興味があると思ったものが一つはあったと思います。現地に行ってみたり、自分なりに調べてみると、今後の皆さんのためになると思います。松崎町は本当にお薦めなので、ぜひ行ってみてください。

ダイロクキッチンも非常に面白いところです。「静大生です」と言えば絶対歓迎してくれると思いますよ。観光でも十分満喫できると思います。フューチャーセンターも、行ってみたいと思ったら、その気持ちを忘れずに足を運んでみてください。

このシンポで何か自分の心に刺さった、印象に残ったところに行ってほしいというのが私からのメッセージです。もし、その中の一つが「しずおかキッズカフェ」だったら、ぜひホームページをチェックしてみてください。人手が不足しているので、もしボランティアにも興味があったらいらしてください。今日はありがとうございました。

**増田**——私の今日の感想は、何かを始めるのに早いとかえらいとか、遅いから駄目というのはないと思っています。私も確かに高校生のときに地域に関わってしまったという感覚ですが、その地域の課題を知ってしまって、高校3年間では足りないとなって、今もお世話になっているという状態です。

それは、私の場合は出会ったときがたまたまそこで、これから一生、今活動している地域に関わるかと聞かれると、何があるか分からないという気持ちもあります。阿部先生も地元と仲直りするのが遅いかもしれないとおっしゃっていたと思うのですが、私はやはり阿部先生、今からでもぜひ新潟にと思いました。

フューチャーセンターにテーマを持ってきてくださる方も、若い方も多いですが、でも4代になってとか、子どもを生んで親の気持ちが分かったときにこういう課題に気付いたとか、当事者になったときに初めて気づいたという方ももちろんたくさんいます。そういう方たちは、自分ごと化されていて、考えている未来を共有するプロセスを、ディレクターっぽいことを言うと考えやすいのです。この方は自分ごと化をすごくされているから、伝えるべき思いがあるというのはすごくありがたいです。

宇賀田先生、やばかったら止めてほしいのですが、うまくいかないアジェンダもあります。参加者の皆さんからお金をいただき、場所を運営しているので、もちろん皆さんに何か持って帰ってもらうものを提供したいと思いながらディレクションしていても、どうしても肌感覚として、今日はうまくいかなかったなとしょんぼりするときがあるのですが、その共通項があります。宇賀田先生とも話していたのですが、あまり自分ごと化されていないオーナーのとき、もっと言うと行政の課のお仕事としていただくとき、もちろん行政の方も大事だと思っているのですが、自分ごと化されているかということ、また別の話になってしまうというテーマのときは、少し難しさを感じる場合があります。もちろん行政の方にも自分ごと化して帰ってもらうことがベストですが、そこまでいかなかったなというときもあります。

どんな年代から始めても、今見つからなくても、大学で授業中寝て、家に帰ってアルバイトしてという生活を今続けていても、私は多分その時間は無駄ではない、そのときが来ていないだけだと思うので、いつからでもいいのではないかなというのが今日の感想です。

**宇賀田**——シンポジウムでフューチャーセンターのことを発表する機会をいただくと、自分たちの活動や自分自身のことを振り返ることができます。私にとってはいい機会です。今日改めて感じたのは、地域課題も個人も多分同じだと思うのですが、自分の周りに3種類の人がいると結構安定しているなと思います。一つは、利害関係のない相談のできる相手です。ある種、親が近いのでしょうか。やはり最終的には応援してくれます。二つ目に、例えばテストで試験前に情報をくれるわけではないのだけれども、精神的な応援をしてくれる応援者。そして三つめは、例えば試験前に「コピーあるから使いなよ」と持ってくれる授業パートナーというか、伴走者。その三つがいるととても安定していると思っています。フューチャーセンターをやっている中で、どの立場になることもいろいろあります。主体者になることもあるのですが、そういう人たちとつながっていくきっかけをとってもらっています。

先ほど小林さんから「伊豆、いいよ」という話がありました。私も4年前がきっかけで伊豆に行くようになりました。本当に松崎町、東伊豆町、南伊豆町にお世話になっていますが、大好きになりました。ぜひ皆さんにも行ってほしいのですが、行くだけではなくて、深澤さんのような方はそんなたくさんもないのですが、こういう方とつきあえると、私にとっては応援者の一人であり、相談相手の一人です。場合によっては、サブのパートナーになる、私にとって深澤さんはそういう方だと勝手に思っています。荒武くんも年は随分下ですけど、僕はとても尊敬していますし、荒武くんのことを僕は勝手に応援者の一人だと思っています。そういうつながり方は、お互いにお互いができる地域の面白さはあるなと思っているので、ぜひ皆さんも学生時代に利害関係のない相談相手、応援者は多分いると思うので、これから何か一緒に学校の授業だけではなく一緒に何かできる人、趣味のパートナーでもいいと思います、ぜひ、いろいろな人を見つけてほしいと思います。

最後に、それこそ伊豆へ行ってほしいのですが、なかなか伊豆に行く時間もコストも大変だと思います。実はフューチャーセンターのディレクターをやると、場合によると大学の出張費で伊豆へ行くことができます。フューチャーセンターに参加していただくのはもちろん誰でも歓迎しますが、ディレクターをやるといろいろな特典があります。ぜひ、興味がある方はお声を掛けてください。

**深澤**——本当にここにいる皆さんにはお世話になっています。つくづく思うのは、人がキーだし、宇賀田先生のお話の中でも「協働の反対が無関心」と、また、マザーテレサという偉人も「愛情の反対は憎しみではなくて無関心だ」と言っています。無関心ということは気付かない、もしくは気付いても無視するということだと思うのです。それは多分、自分の身の回りに起こっていることを、地域の課題なのか、自分の課題なのか、もしくは自分の周りにおける人にとっての課題なのかと考えると、より良くなると思います。

一人の人間でできることはすごく限られています。僕も本当に皆さんに支えていただいて町役場の方で仕事をしています。行政の立場なのか、地域住民なのかの部分があります。それぞれ大きい自治体、小さい自治体でいろいろ立ち位置もありますし、考え方もあるので何とも言えないのですが、多分僕はいろいろな弊害もありますけれども、間違いなく幸せに生きているなと思っています。それは、こうやって関わっているたくさんの方がいるのでそういう思いができるをつくづく思っています。伊豆に来て僕や荒武くんに関わってもらえると、少しは幸せになれると思います。ぜひ、今後ともよろしく願います。今日はありがとうございました。

## 地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

### ■松崎町

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワークは、「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマで実施され、現在は1年から3年までの学生16名の体制で実施されている（2016～2018年のフィールドワークについては成果報告書第4号に掲載）。2019年度のフィールドワークの日程は以下の通りである。

○フィールドワーク・商店街グループ

・5月25～26日、6月13～15日、7月20～21日、11月9～10日、11月30～12月1日（学生有志）、1月25～26日、3月7～8日

○フィールドワーク・観光と防災グループ

・6月22～23日、7月20～21日、8月31日～9月1日、11月30～12月1日、2月15日

○フィールドワーク等から派生した取り組み

松崎フィールドワーク生および松崎町で種々の活動を行う早稲田大学、常葉大学、松崎高校の学生・生徒が参加した「松崎未来デザイン会議」が開催された（第1回：11月30～12月1日、第2回：3月7～8日）。

### ■東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期からフィールドワーク受け入れへとつながった（報告書第3号参照）。

○フィールドワーク「新しい観光スタイルの発掘・創出」

2019年度後期からは1年生から3年生までそろい、計10名の学生が東伊豆フィールドワークを実施中である。遠隔地であるため、各回1泊2日、年6回を原則としているが、学生企画のイベント準備等のため早目に現地入りすることがあった。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである。

・4月13～14日、6月8～9日、7月20～21日、10月19～20日、12月20～22日、2月28日～3月1日

○フィールドワーク等から派生した取り組み

下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。

・5月12日 EAST DOCK オープニングイベントへの参加（学生有志）

・6月2日 伊豆半島地域活性化イベント「アジロック&サバソニ」ボランティアスタッフ参加（学生有志）



伊豆INATORI QUEST (12月21日)

### ■南伊豆町

南伊豆町では、第2期公募に対する課題提案をきっかけに地域創造教育センター、大学教育

センターの教職員が商店街空き店舗やサテライトオフィスの視察、伊浜地区のまち歩き等を行った。その後、地域創造学環の学生や静大FCのメンバーが南伊豆町で展開する地域活性化の取り組みに参加したり、伊浜地区での地域人材育成事業に参加するなど関係性を深めている。2019年度の取り組みの日程は以下の通りである。

- ・6月30日 伊浜・地元学研修第3回
- ・8月19～20日 伊浜・地元学研修第4回
- ・9月15日 トコリンピック伊浜への参加
- ・2月8～9日 伊浜・地元学研修第5回



伊浜・地元学研修第5回(2020年2月8日)

### ■伊豆半島ジオパーク

伊豆半島ジオパーク推進協議会からの提案課題は、地域課題解決支援プロジェクト(第1期)のモデル事業に選定され、博物館フォーラム「伊豆半島における観光振興と住民参加による博物館活動」(日時:2015年1月31日、会場:伊東市観光会館第2会議室)、ジオワークショップ(日時:2015年2月1日、会場:下田市街地)等を開催した。

地域創造学環が開設されてからは、伊豆半島全体をフィールドとして、ジオパークをめぐる2つのフィールドワークが展開しており、1年生から3年生まで計8名が活動している。2019年度の取り組みの日程は以下の通りである。

○伊豆半島ジオパーク(保全と防災)

- ・5月18～19日、6月30日、7月19～20日、8月30～9月1日、11月23～24日、12月14～15日、1月15、20日、2月15～16日、3月7日

○伊豆半島ジオパーク(教育)

- ・5月11～12日、6月15～16日、7月6～7日、11月23～24日、3月6～7日

### ■御前崎市

課題提案自治体の一つである御前崎市では、2018年度から「御前崎市スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～」をテーマとした地域創造学環フィールドワークが展開し、1年生から3年生まで計7名が活動している。2019年度の活動日程は以下の通りである。

- ・7月14日、9月25～26日、11月14日、12月12日、12月29日

### ■賀茂キャンパスの開設

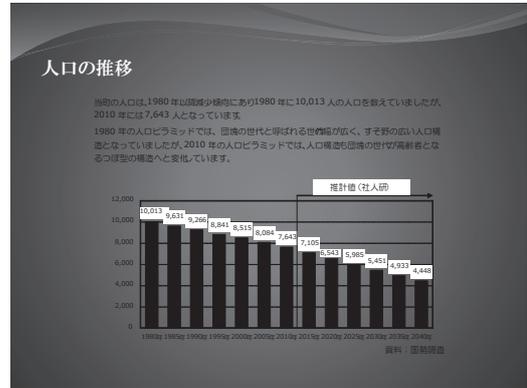
静岡大学が取り組む松崎町、東伊豆町、南伊豆町での活動をはじめとして、大学が賀茂地域で様々な活動を展開できるよう、静岡県・賀茂地域局は1月、下田市に「賀茂キャンパス(賀茂地域大学交流拠点施設)」を開設した。1月24日には、賀茂キャンパス開所式ならびに賀茂キャンパス活用推進委員会キックオフ会議を行った。

キックオフ会議では、フィールドワーク等、大学と



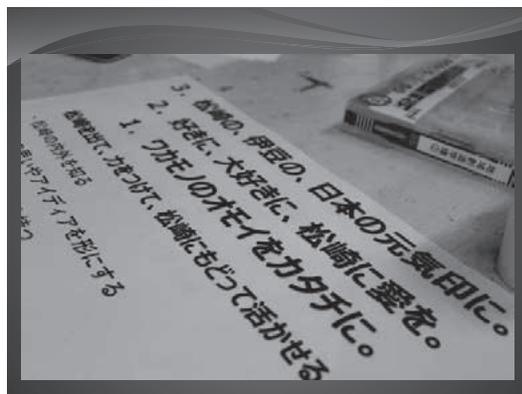
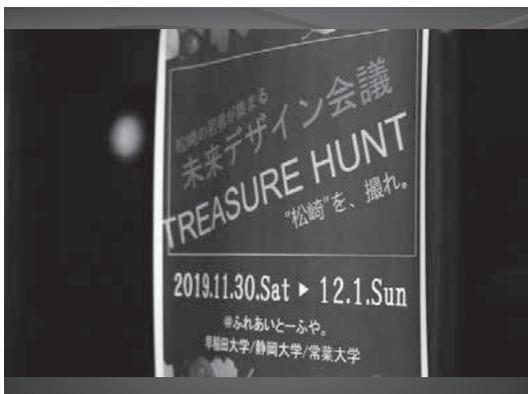
賀茂キャンパス開所式(2020年1月24日)

賀茂地域による取り組みの実態と成果を松崎町教育委員会および静岡大学地域創造学環学生が報告し、今後の可能性と課題について賀茂地域自治体と大学の代表者がディスカッションを行った。参考までに、キックオフ会議における報告資料を本成果報告書に掲載した。



- ★人口流出による過疎化
- ★少子化による人口減少と高齢化
- ★地域産業の担い手(後継者)不足
- ★人・金・知恵が足りない
- ★魅力ある職業がない
- ★地域資源の価値が理解されていない
- ★観光と防災の両立 etc.





伊豆 松崎 町民会館 11/30



宮崎県 鹿野町 12/1



12/1 12/1



ロビーホールスペース 12/1 12/1

## 地域課題をめぐるつながりの可能性

### 参加した学生

静岡大学 地域創造学環  
 早稲田大学 卯月ゼミナール  
 常葉大学 社会環境学部  
 麗澤大学 外国語学部  
 松崎高校 生徒会



その他 地域の人々(小学生～高齢者まで)

## つながりによるメリット

- 地域課題解決学習により、リアルな学習、研究ができる
- フィールドワークを通じて、人とのコミュニケーションが図れる
- 学生にとっては、第二の故郷ができる
- 地域にとっては、新たな関係人口ができる
- 人と人のつながりが、地域活性のチャンスをつくる



## 地域課題解決には、地域だけの力では限界がある

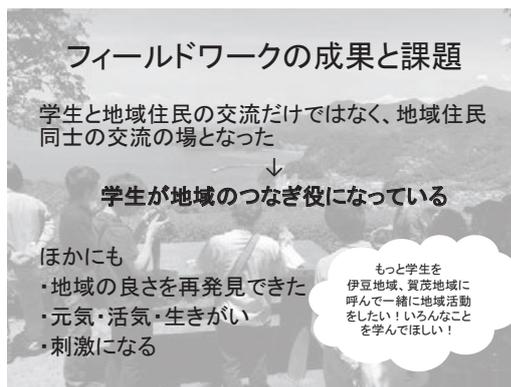
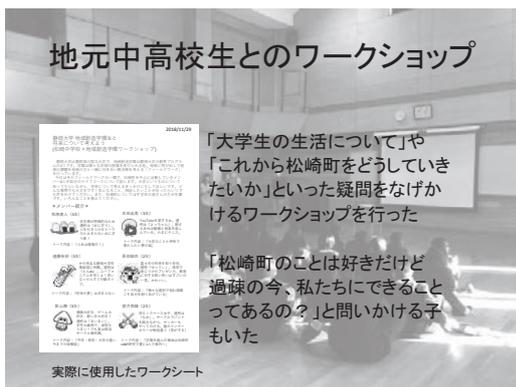
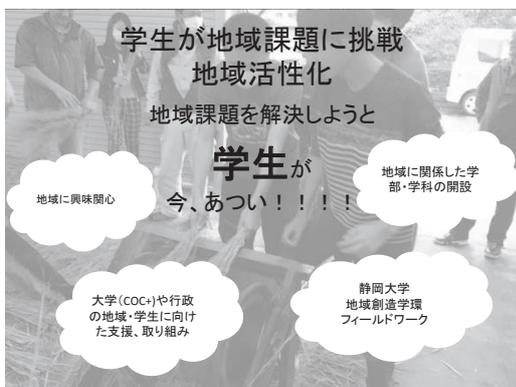
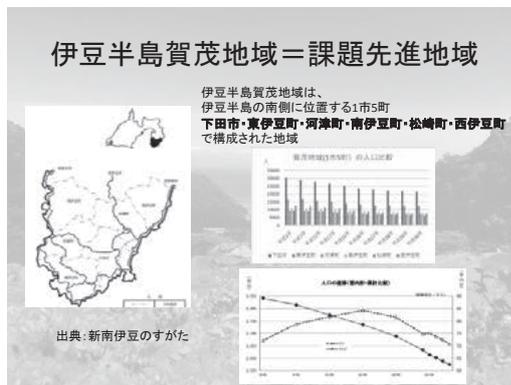
特に伊豆南部では、どの市町も世界中が経験したことがないスピードで人口減少と高齢化が進んでいる

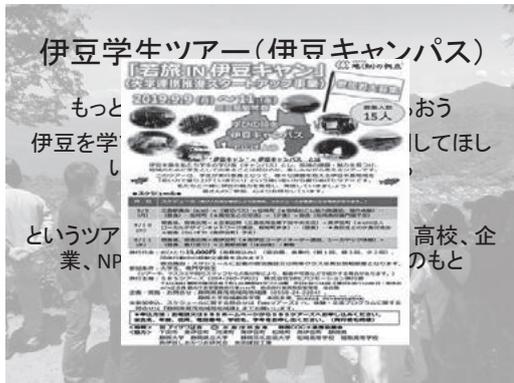
そのスピードに負けないくらい技術革新も進んでおり、地方から活性化を進めるチャンスの時期が到来している

これからも大学との連携でその可能性を探っていく

ご清聴ありがとうございました。



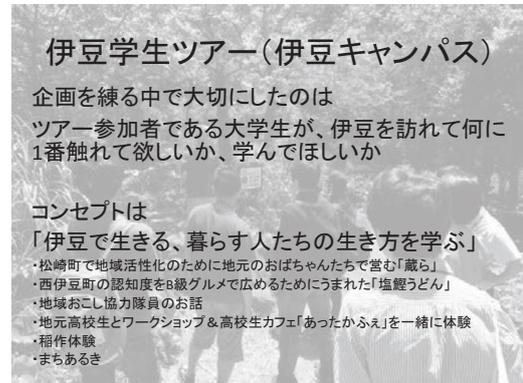




**伊豆学生ツアー(伊豆キャンパス)**

もっと伊豆を学ぼうというツアー業、NP

おうしてほしい高校、企のもと

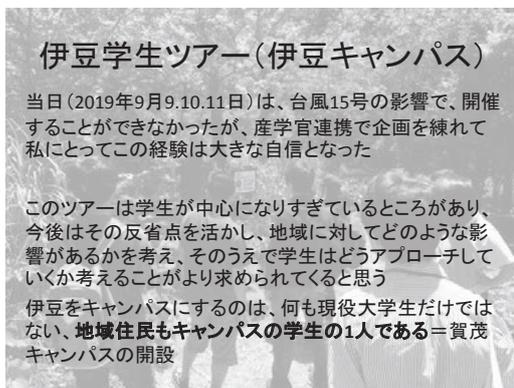


**伊豆学生ツアー(伊豆キャンパス)**

企画を練る中で大切にしたのは  
ツアー参加者である大学生が、伊豆を訪れて何に1番触れて欲しいか、学んでほしいか

コンセプトは  
「伊豆で生きる、暮らす人たちの生き方を学ぶ」

- ・松崎町で地域活性化のために地元のおばちゃんたちで営む「蔵ら」
- ・西伊豆町の認知度をB級グルメで広めるために生まれた「塩麩うどん」
- ・地域おこし協力隊員のお話
- ・地元高校生とワークショップ&高校生カフェ「あったかふえ」を一緒に体験
- ・稲作体験
- ・まちあるき



**伊豆学生ツアー(伊豆キャンパス)**

当日(2019年9月9.10.11日)は、台風15号の影響で、開催することができなかったが、産学官連携で企画を練れて私にとってこの経験は大きな自信となった

このツアーは学生が中心になりすぎているところがあり、今後はその反省点を活かし、地域に対してどのような影響があるかを考え、そのうえで学生はどうアプローチしていくか考えることがより求められてくると思う

伊豆をキャンパスにするのは、何も現役大学生だけではない、**地域住民もキャンパスの学生1人である**＝賀茂キャンパスの開設





## 地域人材育成研修会 実施報告

南伊豆町伊浜区における地域資源の掘り起こしを目的とした  
ご当地カルタの制作

皆田 潔（地域創造教育センター准教授）

## 1. はじめに

地域創造教育センターが主催する地域づくりの担い手育成を目的とする地域人材育成研修会の特徴は、地域と深く連携し、固定した地域でフィールドワーク形式により実践的に展開するところにある。

地域人材育成の難しい点は、地域づくりに特効薬はなく、その土地土地で仕組みをつくる必要があり、様々な地域から広く関係者を募集し、地域づくりの手法を座学で学ぶ形式は限界がある。そこで、本学の地域創造教育センターが2015年から展開する地域課題解決支援プロジェクト事業で連携する地域とより密度の高い関係を構築し、その地で暮らす地域住民と共に地域づくりの実践的活動を展開し、そこに、外部の地域づくり実践者を加えた研修会を企画した。住民が主役となりつつ、多様な人々が地域に集うことで芽生える、住民の視点と外部の視点を組み合わせ、地域資源への着目を促すことで、住民の地域理解が深まり、結果として、住民主体の地域づくりが実現すると考えたからである。

本報告は、2018年度にスタートした南伊豆町伊浜区における地域人材育成研修会のうち、2019年度のご当地カルタの制作ワークショップの様相を報告する。

## 2. 伊浜区の概要

南伊豆町伊浜区は、南伊豆町役場から西に車で約25分の地にある人口約215人、103世帯（2020年2月1日現在）の行政区である。少子高齢化が進み、小学生以下はゼロ、中学生が1名で、高齢化率は54.0%に達する小規模高齢化集落である。

伊浜の集落は駿河湾に面し、海岸線から蛇石火山じやいしに向けた急斜面に家々が建ち並び、狭い路地が集落を張り巡らしている。ここに人々が暮らし始めた記録は古く、伊浜区にある普照寺の書物には西暦793年に開寺したとの記録があるといわれている。人々が伊浜で生活を築いた理由は、蛇石火山から注ぐ豊富な水資源に加え、伊浜の蛇石火山側には「一町田」や「天神原」という地名が示す広大な平地が確認でき、漁業と農業を営める恵まれた地形にあったことが考えられる。

漁業はイセエビやサザエ、アワビなどの高級食材に加え、トコロテンの原料となるテングサや岩のり、ひじき等が採れるが、近年、気候変動と考えられる影響から特にここ数年は、それらの資源の多くが深刻な不漁となっている。一方、農業に目を向けると、昭和初期に温暖な気候と日照の条件から、マーガレットの栽培技術が伊浜に普及し、一時期はマーガレットの生産



図1 南伊豆町伊浜の位置

量が日本一になったこともある。現在は生産者の高齢化に伴い、規模はかなり縮小しているが、現在も首都圏や中部圏に向けて出荷が行われている。図2～5は、戦後間もない1947年から2013年までの伊浜周辺の航空写真である。1963年には、斜面に段畑が<sup>ひだ</sup>襷状に形成され、東側の山中にも大きな農地が広がっているのがわかる。また、1976年の航空写真を見ると、集落に多くの農地が拡大し、マーガレットの栽培が集落をあげて取り囲まれた様子が伺える。しかし、2013年の航空写真では農地が消滅し、草地に戻っており、生産活動が衰退していることがわかる。このように、伊浜は、高度経済成長期をピークに漁業と農業を組み合わせた漁農連携型の産業が展開された地域であった。

また、観光産業では、伊浜には野猿を間近で見られる波勝崎苑モンキービーチがあり、1973年には年間46万人もの人々が訪れた伊豆を代表する観光スポットがあった。しかし、近年は入込客が1.8万人余りまで落ち込み、2019年9月に休園した<sup>1</sup>。

このように、漁業や農業、観光産業の衰退により、地元には雇用の場はほとんどなく、伊浜の住民の多くは南伊豆町中心部や下田市、遠くは伊豆市まで通勤している。

伊浜の地域づくりの主体となる団体は、自治会に加え、若手の伊浜区民が所属する「躍進の会」、女性会としての機能を持つ「ドーナツの会」がある。2017年にはこれらの団体が主体となって、トコロテンの長さ世界一に挑戦した「トコリンピック」が開催され、ギネス認定がされている。



図2 1947年の航空写真  
マーガレットが普及する前の農地(白丸部分)



図3 1963年の航空写真  
(左下枠) 棚田状の農地が形成  
(右上枠) 蛇石火山側の天神原区に広大な農地が出現



図4 1976年の航空写真  
拡大した農地。マーガレット栽培の最盛期前後にあたる。  
右上には1972年に開通した国道136号(通称マーガレットライン)と左端は波勝崎モンキービーチの駐車場が確認できる。



図5 2013年の航空写真  
農地の多くが消滅し、草地化している

(出典) 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス<https://mapps.gsi.go.jp/> (図2～図5)

1 波勝崎モンキービーチは2020年4月に県内民間企業により再開予定。

### 3. 研修会の実施体制

伊浜区と連携したご当地カルタを制作する本研修会は2017年12月に、しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業の助成を受け静岡県庁や静岡市、焼津市、南伊豆町の行政職員や近隣の市町の地域おこし協力隊らが参加して実施し、その研修会が盛り上がったことから、当方から継続的な連携活動を提案し、伊浜区から好意的な返答を受けた。この地域人材育成研修会以降の取り組みを表1に整理した。すべての回において学生と教員、スポット的に南伊豆町役場職員や近隣地区の住民が参加した。本学からは地域創造教育センターのセンター長、阿部耕也教授と川崎和也特任助教と筆者、そして阿部、皆田のゼミに所属する学生が主に参加し、2019年度は春、夏、冬に実施した。秋にも実施する予定であったが、伊浜区民に不幸が生じたため開催を見送った。

研修会の開催にあたっては、毎回伊浜区自治会と実施スケジュールや取材場所などに関する助言をいただき、また、自治会を通じて伊浜区民にカルタの制作や大会の呼びかけを丁寧に実施していただいた。地域に我々のような外部の主体が関わり、連携を図る場合、地域につながり役となる人材は不可欠で、一連の連携活動が円滑に行えたのは、伊浜区自治会の下支えがあったからこそである。

表1 2018～2019年度の活動実績

	開催日	外部参加者	うち学生	伊浜区内参加者	合計	カルタ作成枚数
第1回研修会	2018/12/7,8	10人	3人	21人	31人	116
第2回研修会	2019/3/24,25	8人	4人	11人	19人	取材のみ
第3回研修会	2019/6/30	5人	3人	8人	13人	97
第4回研修会	2019/8/18,19	9人	5人	12人	21人	80
第5回研修会	2019/11/1,2	中止				
第6回研修会	2020/2/8,9	9人	4人	21人	30人	117

### 4. カルタの制作

ご当地カルタは、足元にある暮らしを見つめ直し、そこに暮らす人々がその価値に気づくことができる手法で、地域にあるものを題材に絵札と読み札を作成し、地元をテーマにしたカルタで楽しみながら、地域の価値を地域全体で共有する試みである。

南伊豆町では過去、地元の有志が伊浜を始め、各地区の漁業や農業、歴史、そしてこれらと密接に関係する暮らしを聞き書きによってまとめる取り組みがなされ、これまで5版の聞き書き集「知ってんげえ」が出版された。一方で、書籍にまとめられた情報は、非常に詳しい内容であるものの、広く読まれることが少なく、その価値が地域づくりにおいて十分に活かされていないと言えらる。このようなエピソードを制作者の一人から聞くとともに、これは筆者が実践する地元学においても、地域資源調査でありがちな「調べた人しか詳しくならない」現象が生じていた。

そこで、多くの伊浜区民が楽しみながら、地域資源を知り、カルタの造り手の地域への想いを推量することができる、ご当地カルタの制作を提案し、伊浜区自治会の全面的な協力の下、1年間に渡る制作活動が始まった。

ご当地カルタの制作は、取材、制作、カルタ大会の3部



図6 マーガレットを撮影する学生

で構成される。取材は、住民と学生、教員の混成グループを毎回2～3グループ編成し、伊浜区内をまちあるきにより取材する（図6）。そして、「おもしろい」、「なにこれ?」、「自慢したいもの」、など、それぞれが感じた地域の素材を撮影し、印刷したものを板目用紙に貼り絵札とし、その意図を読み札に記す流れである（図7）。取材、制作には毎回、伊浜区民10名前後が参加し、カルタ大会にはその他の伊浜区民の参加があり、子供から高齢者までが集い、毎回盛り上がりを見せた。



図7 カルタ制作の様子

## 5. 伊浜カルタの成果

### (1) カルタの紹介

2018年12月から2019年度にかけて制作したカルタは410枚に上る。この間、カルタ制作ワークショップを5回開催し、毎回100組前後のカルタを制作し、その数を積み上げてきた。各々が自由に絵札、読み札を作成するため、決まり字（読みはじめの一文字）の重複が多く、実際にカルタ大会を行ってみると、読み札を聞くのみでは、絵札を判別することが難しく、読み札をよく聞き、絵札の画像と一致しているか考えなくてはならない難易度が高いカルタ大会になった。結果、「おてつき」が増えたり、絵札と読み札を見比べ、成否を判断する「審議」ができるなど、伊浜ルールが生まれていった。この「審議」には意外な効果があり、カルタ大会参加者がそれぞれの画像を見比べて「これはいつ撮影したの?」、「こんな場所があるのね」など、気づきを与える機会にもなった。

決まり字の重複への対処は、カルタ大会に用いるカルタを投票で1～3組に絞り、混乱を避けるよう工夫がなされた（図8）。



図8 決まり字の分類作業

カルタ大会は1ゲームを終えるたびに住民自らが感想を述べたり、ルールが改善されていくことにより、盛り上がる大会が出来上がっていった（図9）。このような、積極的に意見を交わし、より良くしていこうとする行動は、地域づくりにも共通し、住民が自由に意見を述べ、改善のために話し合い、それを行動に移す雰囲気を自然に体感してもらうことができた。



図9 カルタ大会の様子

次に、1年間に渡って制作した410組のカルタのうち、筆者が選定した地域性のある個性豊かなカルタを、①風景・景観、②気候、③漁業・農業、④食材、⑤祈りの場、⑥交流、⑦誇りに分類してそれぞれ紹介したい。

#### ①風景・景観（図10）

取材のためのまちあるきは伊浜区内を隅々まで訪れたため、風景・景観を題材としたカルタが多く見られた。特に、波勝崎苑モンキービーチは観光地であったこともあり、猿を用いたユニークな読み札が目立った。また、海岸線から急な斜面に集落が形成される地形を読んだカルタは伊浜の地域特性をよく表している。その他、住民がそれぞれ想う地元伊浜の好きな場所や景色をカルタにしたり、学生の視点による伊浜の素晴らしいと感じるロケーションをカルタに引き出すことができた。



図10 風景や景観を題材にしたカルタの一例

## ②気候 (図11)

伊豆半島の西側に位置する伊浜は、年中西からの強風に晒され、風よけの知恵と風を利用した風土が見られる。外部からの研修会参加者がその風と押し寄せる高波を体感して感じた驚きや、台風後の漂流ゴミを題材としたカルタ、そして、風を利用した乾燥に着目したカルタは、干すものが食料や漁具、衣類など複数あった。西風は伊浜を代表するキーワードに位置づけることもできる。

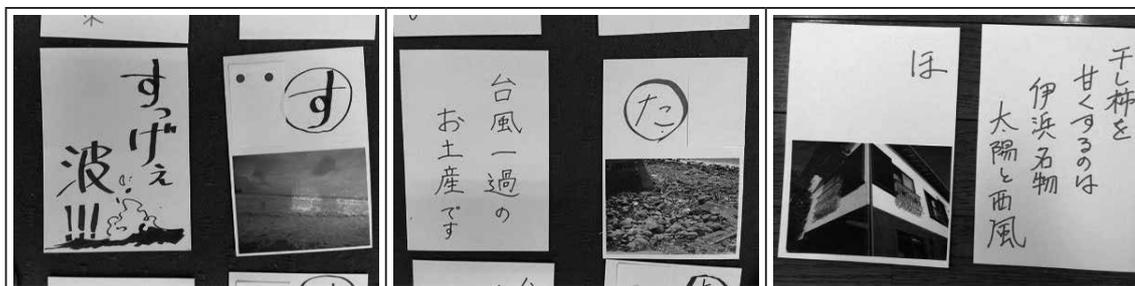


図11 気候を題材にしたカルタの一例

## ③漁業・農業 (図12)

冒頭に述べたように、伊浜は、昔から漁業と農業を営むことができる優良な土地で、その海と陸の恵みが伊浜の暮らしを豊かにした。カルタでは、漁業や農業を軸足にした生活の様子が多く題材になった。中でも、漁法に関するものや大漁に湧き、大きな収入を得た逸話、女性の漁の仕事、一方で強風や高波と隣り合わせの危険な漁であることを伺い知る、貴重な体験が込められた作品が揃った。また、農業では、集落の家々の隙間を埋めたように密集する農地からかつての盛勢を窺い知ることができ、マーガレットの生産量日本一に加え、伊浜の名がついたマーガレットの品種が誕生するなど、現在においても伊浜の誇りに繋がっていた。近年、その農地では獣害が深刻化し、農作物が広い範囲で大きな被害を受けている。



図12 漁業や農業を題材にしたカルタの一例

④食材 (図13)

海と農地から得られる食材は、伊浜の食も豊かにしていた。海岸で採取される魚介類には市場に流通しない希少な素材もあり、カルタにはそれぞれの食材の美味しい調理方法や食し方が記され、今後の活動の発展として伊浜の郷土料理のレシピづくりの可能性を見つけることができた。また、画像で紹介していないが、祭事に食す鶏肉の炊き込みご飯の「肉飯」は、伊浜の人々に愛されている郷土料理である。



図13 食材を題材にしたカルタの一例

⑤祈りの場（図14）

暮らしを支える安心の拠り所となる信仰に関する題材が伊浜では多く見られた。伊浜には普照寺や菅原道真を祀る天神社がある<sup>2</sup>。普照寺を取材した際には、住職から特別に文化財登録されている仏像や仏具の解説を受けたり、天神社では学生らが神事の準備から奉納の儀式にまで参加させていただき貴重な機会を得ることができた。



図14 祈りの場を題材にしたカルタの一例

⑥交流（図16）

学生の参画は、一連の研修会を盛り上げた一つの要因と言える。若者が少ない伊浜において、外部の人材に加えて、異なる世代の参加は少なからず、伊浜に賑わいをもたらすことができた。今年度参加した学生の中には、写真部に所属する学生やイラストに長けた学生がイラストでカルタを制作したり（図15）、活動中、波勝崎苑にちなむ猿の帽子を被り、場を和ませていた。特に、図16中央下段の「ラブラブの二人で見つけた<sup>ハート</sup>石」は、学生が海岸で、ハートの模様が浮かぶ石を見つけ、それを題材にしたカルタは、伊浜の人々が「どこにある?」、「なかなかみつからない」と話題になった作品である。また、伊浜区民が作成するカルタに、学生を題材にしたものが回を重ねる毎に増え、予想以上に地域と学生の関係の醸成が図られていることが伺えた。

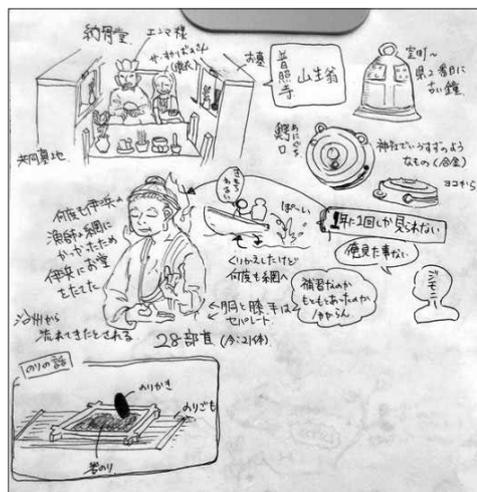


図15 学生の取材ノート

2 天神社は元々、農業の神を祀る<sup>あざの</sup>蛇野神社と呼ばれていた。

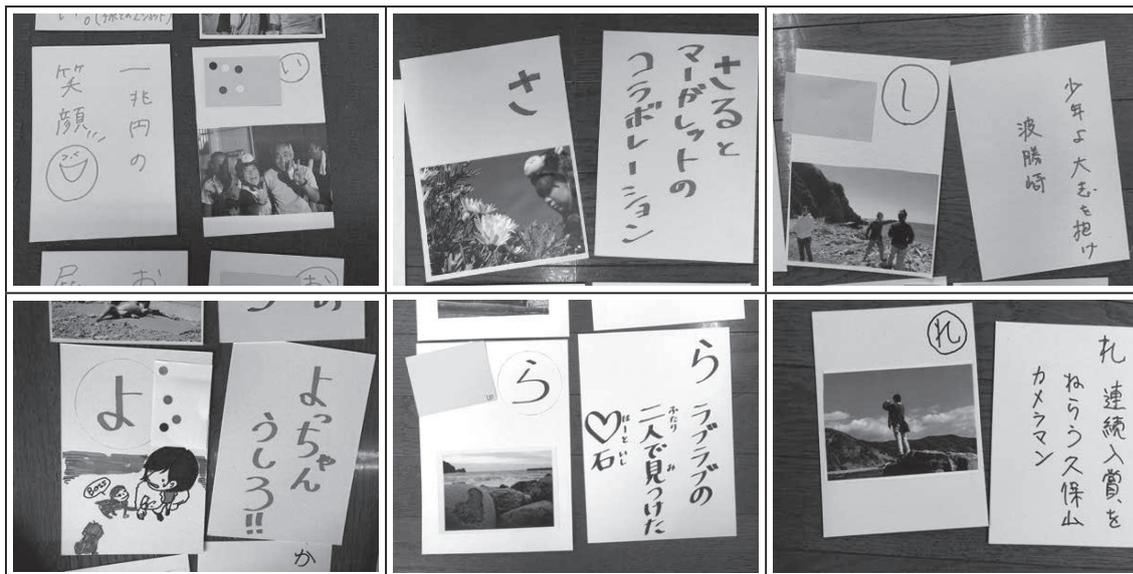


図16 学生との交流を題材にしたカルタの一例

### ⑦誇り

図17の3作品は、伊浜の人々の地域を想う気持ちが現れている。人の良さや人と人との関係の密度がよく伝わってくる。「いいところ」、「伊浜が好き」と住民自らが表現したカルタが複数できたことはプログラム企画者として嬉しい成果であった。また、2018年度に開催したトコロテンの長さ世界一の記録を達成したトコリンピックは伊浜の誇りを高めるに至った。カルタ制作中にはトコリンピック実行委員の方から、試作品の失敗を繰り返した末に記録達成があったと聞くことができ、当事者のみを知る、その苦労や改善した知恵をカルタに残すことで、その記録は活きた記録になるはずである。

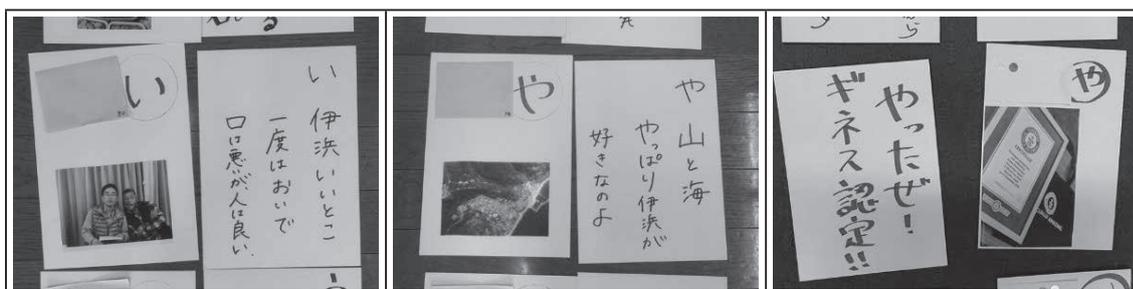


図17 地元への愛着や誇りを題材にしたカルタの一例

### (2) 題材の分類

前項では7項目に分けてカルタを紹介したが、ここでは、分類の幅を広げ、カルタから読み取れる伊浜の地域イメージについて考えてみたい。

図18は410組のカルタを12分野に分類し、その割合を示したものである。カルタの題材に最も多く用いられたのは、伊浜の風景や景観、ビュースポットについてである。その数は全410組中、81組に上った。制作者は伊浜区民、学生、外部からの出席者に偏りは見られず、その多くの画像は海のある風景や森の中に霧が立ち込める光景など、「美しい」と感じた景色を切り取ってカルタが仕上げられている。また、防風林の役目をするビャクスギや急峻な地形に石垣が積まれ、そこに家や農地が立地する風景に着目する題材が目立った。

次に多かったのは、祭りや寺社、<sup>ほこら</sup>祠など祈りの場に関する題材である。これは、伊浜の方による作品に多く見られた。漁業など危険な仕事に従事される方が多く、その安全を祈る所作が日常にあり、その気持ちがカルタに現れていると想像する。

3番目は、主に学生とその交流の様子を題材にしたカルタで、その割合は全体の1割を上回っていた。また、作成された時期にも特徴が現れている。初回の冬の研修会で、学生が題材になったものはゼロ、2回目の春は5組、3回目以降の2回の研修会では39組と徐々に増えていく傾向が見られた。この変化は、伊浜区民と学生の距離が縮まり、回を重ねるごとに親しい関係が構築されたということが推察できる。実際に、夏以降の研修会では学生と住民が冗談を言い合う場面が頻繁に見られるようになり、後で詳しく述べるが、3回目以降は自治会と住民のご厚意で、学生の宿泊先が住民宅になった。作成したカルタを見ても、学生と住民、お互いのことを題材に作成する様子も見られ、笑いが絶えない研修会になっていった。

4番目から6番目に多く見られた題材は僅差で4位に漁業、5位は植物や植生、農業、そして同数5位に暮らしや道具、方言をテーマにしたものであった。いずれも、伊浜の特徴を表した作品が多く見られ、漁業では、イセエビやアワビなどの高級品種から岩のりやテングサなどの伊浜で採取できる資源が多く題材にされ、農業ではマーガレットの他、アロエやオオシマザクラ、ハイビスカス、ストレリチアなど多彩な植物の名前が並んだ。南伊豆町の温暖な気候に育つ花々で伊浜を彩る光景が伊浜区民、外部の者の区分なく、惹きつけていることが伺える。急峻な決して条件がよいとは言いがたい土地に多くの人々が暮らす理由は海と農地の恩恵に与る<sup>あずか</sup>漁農一体の暮らしが伊浜にはあった。

また、伊浜の気候についても触れておく必要がある。カルタを紹介した前項で触れたように、年中を通じて、特に冬場に吹き付ける西からの強風は、伊浜の特徴の一つである。住民は西から風が吹けば、風は強いが気温は高い、「ナライ」と言われる北東の冷たい風が吹けば海は風ぎ、天気は崩れる、といったように風向きで天候や海の状況を予測していた。漁業に携わる方が多く、風向きはそれに大きく影響されるため、伊浜に住む方の多くが、このような感覚を身に付けていた。

このように伊浜のイメージを探るため、カルタの題材に取り上げられた数を元に分析を行ったが、漁業や農業、植生や気候、そして暮らし等から伊浜の特徴や個性を数値化することができた。多くのカルタに取り上げられた題材は、多くの人々が感じる伊浜のイメージとしてこれからも大事にしていくことが重要であり、一方で、題材にあまりならなかった、食材や水資源などのキーワードは、今後、そこへの着目を意識することで一層、伊浜の強みになるといえるだろう。

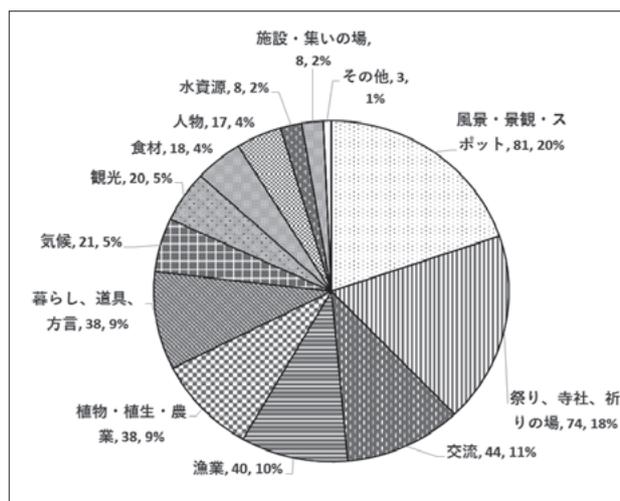


図18 カルタに用いられた地域資源の分類

## 6. 地域との関係づくり

地域課題解決支援プロジェクト事業における伊浜との関係は2017年12月に教職員のみで現地を訪れ、伊浜区自治会役員の松本恒明氏と当時、南伊豆町の地域おこし協力隊の松原淑美氏に伊浜を紹介していただいたのがきっかけである。それ以降、阿部耕也センター長と筆者が数回、伊浜を訪問し、地域活動などのヒアリングを行ってきた。伊浜には身近な地域資源を暮らしに役立てる古くからの生活様式が家々から感じ取ることができ、ヒアリングから強い団結力で地域運営がなされていることが明らかになり、希薄化する地域コミュニティの模範に位置づけたいと考えた。そして地域人材育成研修会のフィールドワークの会場とすることを自治会に提案し、2018年12月に第1回の研修会を開催した経緯がある。この前には自治会から秋祭りへの招待を受け、学生1名、教員3名が参加した。学生が訪れたのがこれが最初であった。後に伊浜の方から、現在の伊浜区民が研修会に関わる動機に、「学生や教職員が秋祭りに参加したことが地域住民の大学に参与する気持ちを変えた」を話された。研修会といった大学側の企画を実施するのみでなく、可能な限り、日常の地域行事に参加し、親睦を深めることの意義の重さを示す地域の言葉である。



図19 祭典前の準備の様子

第1回の研修会には、静岡県庁や静岡市や焼津市の行政職員に加え複数の学生が伊浜を訪れ、本格的に交流活動を開始した。2018年3月には、伊浜区北側の蛇石火山近くの天神原区にある天神社の例祭に招待され、4名の学生が参加し、祭典の前には参道の清掃や幟を立てる作業などを手伝った（図19、図20）。2018年度は12月と3月に2回行ったが、その中で課題として挙げたのが、学生の宿泊であった。一般的に学生が泊りがけでフィールドワークを行う場合、その費用は自己負担となり、学生が参加しにくい状況にあった。



図20 天神社の祭典に参列

このような折、自治会の役員から、「夏の研修会から、学生は役員の自宅でホームステイで受け入れる」との提案をいただいた。一方で伊浜区内には複数の民宿があり、我々はそこへの配慮を心配したが、役員が各民宿に了承を働きかける丁寧な対応により、学生の自己負担なく、参加することが可能になった。11月の秋祭り参加から12月、3月の研修会の実施を経て、伊浜の方々との関係が次第に深まっていくのを実感した。

こうした地元側の厚意に応えるため、以前から松本氏から伺っていた伊浜の海岸の漂着ゴミの問題に対して、その清掃活動を手伝うことになった（図21）。日頃から伊浜区民が定期的に清掃活動を行っていたが、その漂着物の量は膨大で、清掃しても高波の度に元の姿に戻るといふ（図22）。清掃活動はカルタの制作が始まる前の朝6時半から毎回開始し、30分程度で図23の量のゴミが集まる。圧倒的に多いのはペットボトル容器であり、岩と岩の間に挟まれているものも多く、その除去に苦慮した。また、容器は潰れていない状態で、高張り、ゴミ袋に



図21 伊浜海岸の清掃活動の様子

詰めた際、殆ど数が入らないため、集積場と海岸を何度も往復しなくてはならなかった。そして、ペットボトル容器の他には、タイヤや流木も見られ、一人では運ぶことができないサイズのものも少なく、足場の悪い岩場を複数人がゴミを抱えて撤去する危険な作業であるなど、清掃活動を実際に体験してみてもわかったことが数多くあった。



図22 窪みに集まった漂着ゴミ

この海岸清掃活動は、地域課題や環境問題に直に触れる機会にもなり、教育の面においても効果の高い活動になっている。また、住民と共に汗を流して、共感を得る貴重な機会であり、信頼関係を一層深めるためにも、今後も訪問時には、この清掃活動をプログラムに盛り込む予定である。



図23 集められた漂着ゴミ

このような地域住民との関係構築により、伊浜区民がカルタ制作に積極的に参加されるようになった。例えば、研修会当日の取材活動のみでは、天候や時期により、最も良い場面を画像に収めることが難し

いが、住民との関係が深まるにつれて、住民が日常的に画像を撮影してくれるようになった。そして、その画像を研修会当日に学生らに見せて、説明する場面が増え、その場所に案内してもらい流れができ、学生も来年はその一番良い時期に来たいと話し、訪問の意欲につながった。

この過程は、近年注目されている関係人口の理論にも当てはまる（図24）。最初に訪問した2017年は伊浜の方にヒアリングを行う一方的な関係であったが、その後開催した研修会に外部の参加者や学生が参加し始めた時期から交流人口、関係人口へのシフトが始まり、頻繁な訪問を重ねることで、参加者が伊浜のファンになっていった。図24の関わりの段階に当てはめると、一連の活動は「頻繁な訪問」から、現在では一段階ステップアップした、海岸清掃のような「現地ボランティア活動」の位置にあると言える。学生という立場を踏まえると、さらにその上の「二地域居住」に至ることは難しいが、学生の研究テーマ次第では、地域に住み込み、滞在型のフィールドワークの可能性はゼロではない。実際、カルタの取材で行ったまちあるきの際には、空き家を交流の場にしていきたい、と自治会役員が話す場面もあり、交流と滞在の拠点ができれば、ホームスティによる各家庭の負担が減り、大学としては現在以上に活用がしやすくなるだろう。

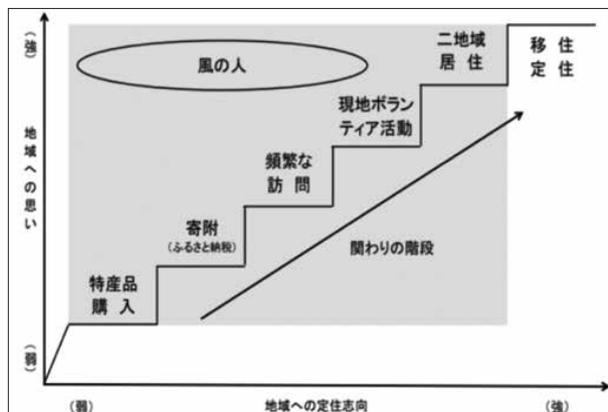


図24 関係人口の位置  
 (出典) 日本農業新聞2017年6月4日付「農村関係人口の可能性」より



図25 伊豆新聞2020年2月12日掲載

最後に、この活動の情報発信について記しておく。一

連の研修会の模様は、伊豆新聞にこれまで2回、今年度は1回掲載された（図25）。また、図26は、ふじのくに美しく品格のある邑づくり連合が発行する「むらのおと第24号」の抜粋で、県内の大学が展開するフィールドワークの様子を紹介する特集企画に、伊浜での研修会の運営に携わる学生が寄稿した。また、写真部に所属する学生は、カルタの取材時に撮影した写真を県内のフォトコンテストに応募し、入賞を収めた（図27）。

### 自然と向き合う暮らしを知る

南伊豆町伊浜は駿河湾に面した伊豆の原風景を今に残す約250人が暮らす漁村です。急斜面に家々が建ち並び、家屋の海側に植えられた潮風に強いひびやく杉が強い西風から家を守っています。活動を通じて伊浜を丁寧に見ていくと美しく、また時には厳しい自然と寄り添う暮らしの知恵と工夫が詰まっています。伊浜での暮らしは大変なことも多いと住民のみなさんは話されますが、

**フィールドワーク レポート 静岡大学**

静岡大学では、農学部や地域創造学環で、地域課題を解決する能力を育むため、現地でフィールドワークを行っています。今回は、伊豆半島南部に位置する邑「伊浜」での活動を紹介します。

## 伊浜カルタをつくろう — 地域にあるもの再発見! —

### 楽しみながら伊浜の魅力に気付くカルタ

伊浜カルタの製作はとてもしンプルです。四季の日常の景色や人々の暮らしを写真に収め、絵札をつくり、読み札にそれらにまつわるエピソードを記す手づくりのカルタです。予算がなくても地域づくりはできる。これが地元学の強み。住民の方に問いかけ、そこに暮らす人々の想いを知り、日々の暮らしを垣間見て、それを表現出来るのがこのカルタの面白いところだと思います。

地元の方が集まる時には出来たカルタを使って遊んでくれていると聞き、嬉しかったです。カルタづくりによって改めて地域にあるもの見える化ができてきました。今では伊浜のみなさんと距離も縮まり、元話を言い合える関係になりました。私たちもみなさんとの交流を楽しみ、その中で伊浜の方にとって当たり前前のものが伊浜の良さだと気付いてもらえ、このにやりがいを感じています。

文・中山理沙（地域創造学環3年）

それでも伊浜を語るその表情はとて温かく、その根幹には「ここに生きていくのだ」という力強い想いが感じられました。



カルタの製作。読み札に人柄が出る!



これまで作ったカルタは270組。作ってすぐカルタ大会



### 伊浜地区

いばまち

賀茂郡南伊豆町伊浜地区

- 車 / 東名高速沼津ICから約100分  
新東名高速長泉沼津ICから約110分
- 電車 / バス / 伊豆急下田駅がら南伊豆東海バスで「伊浜」バス停下車

南伊豆町の北西に位置し、温暖な気候を活かしてマーガレットの栽培が盛んで、全国有数の産地として知られています。また、地域内にある、遊休農地を活用した、マーガレット狩り園は自治会員のボランティアにより運営され、開園期間中(例年4～5月)は無料でマーガレット狩りが楽しめます。

Shizuoka University

むらのおと 13

図26 ふじのくに美しく品格のある邑づくり連合が発行する「むらのおと第24号」に掲載した伊浜の活動報告

62

このような報告や発表の機会を通じて、学生は伊浜での活動のモチベーションが高まると共に、伊浜の方にも喜んでいただくことができた。情報発信は、大学が担える地域貢献の一つとして今後も引き続き積極的に行っていきたいと考えている。

## 7. むすびに変えて一今後の展開

地域課題解決支援プロジェクト事業は年度の区切りのない、地域と継続した関係を構築する長期的な取り組みである。伊浜とは今後も地域課題の解決に取り組む人材育成の重要拠点として取り組みを継続する。活動の継続を断言できる理由は、今年度の活動は、低コストを意識して実施したことにある。2018年の研修会は外部資金を用い、貸切バスを調達し、参加者の送迎を行ったが、それ以降は大学の公用車を使用し、旅費のみで実施し、用意したカルタに使用した資材は市販の板目用紙など安価な事務用品のみで、写真を印刷するプリンターは普段大学で使用している機材を使用した。

地域連携を継続して行う秘訣は、低コストでの実施が挙げられる。外部資金の多くは執行が年度単位で、しかも額が大きくなりがちである。その予算を消化するため、プログラムが豪華になりかねない。豪華になれば、それを以後もその額で継続する意識が働いたり、関与する者もそれに期待してしまう心理も考えられる。「カネの切れ目は縁の切れ目」にならないよう、最低限の資金で、着実に地域との関係を深め、実績を積み上げることが地域連携を図る上で非常に重要なポイントである。地域課題は住民と外部人材が知恵と工夫を凝らし組み合わせることで解決できるという事実をここに記しておきたい。

さて、ご当地カルタの制作は四季毎の風景や暮らしを収め、地域資源となる個票に位置づけられるデータの蓄積ができた。そのデータは伊浜区民や学生らが手書きでカルタの絵札と読み札を作成した非常に簡素なものであるが、「手づくり」であるのも愛着を高める要素である。見栄えは良いとは言えないが、カルタを各々が作成する作業が、地域への知識や愛着を深めることに繋がる。カルタを業者に発注した製品にしようとする、その校正に手間と時間を要し、地域資源に着目するという目的が薄れてしまう。ご当地カルタを企画した我々の立場は、カルタの完成形は手作りのままでよく、その一つ一つのカルタに用いた地域の情報を深める作業の優先が重要であると考えます。

今後の活動は個々の資源を深掘りし、例えば、漁業では漁法の記録や採れた食材を伊浜区民が日常どのように食しているかなど、レシピを作成するといった展開やカルタを撮影した場所を地図化し、地域資源マップや地域資源カードの作成を検討している。加えて、カルタ大会の実施にも工夫を加え、伊浜独自のルールを定めて、伊浜の多くの住民に、作成に携わった伊浜の人々の想いや外部の人々の視点が込められたカルタに触れてもらい、賑わいをもたらすツールに育て、これまで接点がなかった伊浜の方々に対して、地域づくりへの参画の動機の形成や、住民と学生らが交わった伊浜の賑わいづくりに貢献していきたい。

## 参考文献

- 松井貞雄「伊豆川津谷における花卉園芸」,人文地理 Japanese journal of human geography 人文地理学会編,1948
- 佐佐木綱「景観十年風景百年風土千年」蒼洋社,1997



図27 「第10回静岡の魅力 フォトコンテスト」  
グランシップ学生賞入賞作品  
題名:「天神原の朝」、撮影者:久保山健太(3年)

大久保幸夫「中山間地域住民の地域に関するイメージ分析—鹿児島県いちき串木野市羽島地区を事例として—」,地域総合研究 鹿児島国際大学附置地域総合研究所,2017

新井克弥「郷土かるたを用いた地域アイデンティティ形成教育の可能性」,関東学院大学人文科学研究所報 第42号,2019

# 地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト

地域創造教育センター長  
阿部 耕也

地域連携を通じた社会貢献と地域人材育成を推進するため、平成29年10月に開設された地域創造教育センターも3年目を迎え、活動の場をキャンパスから地域というフィールドに移して様々な展開が生まれてきています。

センターの前身（イノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門）で平成25年度に始まった地域課題解決支援プロジェクトも7年目を迎えました。県内各地で取組が行われ、これまで刊行した5冊の成果報告書にみるように、地域の方々との交流を通して、学生も教職員も多くの事柄を学んでいます。地域課題の提案をきっかけとして、各地域に関わり、住民の方々との交流し、課題解決をともに考え、また活動することを通して、学生たちは地域に貢献できる人材として成長し続けています。

今年度地域創造教育センターが中心となって実施した東海地区社会教育主事講習においても、地域の課題と資源について学び、その解決支援を考えるプログラムを入れ、演習・グループワークで伊豆半島賀茂地域・南伊豆町で2泊3日の宿泊研修を組み込みました。そのさい、講師・助言者・ファシリテーターとしてご協力くださったのは、松崎町、東伊豆町、南伊豆町で活躍する地域課題の提案者の方々であり、静大フューチャーセンターや地域創造学環等、これまで地域課題解決支援プロジェクトに参画してきた教職員および学生諸君です。

静岡大学では、第1期・2期の公募で寄せられた地域課題の解決支援を進めており、学内外の多様な担い手に協力いただいています。平成28年度に開設された学部横断型教育プログラム「地域創造学環」との連携・協働も5年目を迎えようとしており、4月には初の卒業生が地域に旅立ちます。

これまでも繰り返し述べてきたように、地域課題解決支援プロジェクトは、大学が地域づくりの支援者・担い手になろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければ成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学  
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書 第5号

発行日— 2020年3月27日

発行— 静岡大学地域創造教育センター

編集— 大谷悦子

連絡先— 静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817 E-mail : kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト— <http://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

印刷— 株式会社三創